



教育年報 2009

岡山県立大学

はじめに

岡山県立大学評価委員会
委員長(学長) 三宮信夫

本学は、開学後 14 年を経た平成 19 年 4 月 1 日に公立大学法人岡山県立大学として新しく生まれ変わりました。現在、大学を取り巻く環境は、少子化とグローバル化の大きな流れの中で大変厳しいものとなっていますが、法人制度の導入効果を十分に活かして自主的、自律的な運営のもとで、発展を続けていきたいと考えています。

本学の中期目標には、「人間・社会・自然の関係性を重視する実学を創造し、地域に貢献する」ことが基本理念として謳われており、知性と感性を育み、豊かな教養と深い専門性を備えて、新しい時代を切り拓く実践力のある人材の養成を目指しています。このような目標を実現するために、全学的には教育研究活動委員会および教務専門委員会において、学生の立場に立ってカリキュラムやそれに基づく各授業科目の教育内容や方法の検討が持続的に行われ、評価委員会においてその結果を議論し、評価してきました。一方、学部・学科レベルでは教授会、学科会議、各学部の評価分科会、教務委員会などがその役割を分担しています。

これまでの本学の教育活動は、平成 16 年度から毎年刊行している「教育年報」にまとめられています。その中の成果の一つとして、平成 16 年度から毎年実施してきた「学生による授業評価アンケート」の結果を統計的に分析して、本学独自の「授業評価測定尺度」を作成したことが挙げられます。この尺度を用いたアンケート結果の集約は、各教員の授業改善の基礎データを与えており、また、教員の個人評価において、教育活動に対する評価項目の一つになっています。

本学は、21 年度に大学評価・学位授与機構の認証評価を受けました。その結果として、本学がこれまで実施してきた、教員の相互授業参観、地域に貢献する人材育成、教養教育を実施するための責任体制、教員組織の活性化のための種々の方策、教員の個人業績に対する多面的評価、大学の教育研究活動の積極的公開及び情報発信などに対して「優れた点」と評価されました。

今後も教育改善を重ね、社会に出て活躍できる能力を身につけた学生を育成するように努めたいと考えています。

今後とも皆様のご支援・ご協力をお願いする次第です。

2010年5月

目次

第1章 2009年度の主な改革

1. 概要.....	1
2. 教育力向上支援事業.....	1
3. 全学教育の改革.....	2
4. 大学院長期履修学生制度の発足.....	3
5. 職員表彰.....	3
6. 学生支援.....	5
7. キャンパスマネージャの活動.....	8
8. 大学機関別認証評価の結果.....	9

第2章 FD活動

1. 概要.....	11
2. 授業参観.....	11
3. 授業評価アンケート.....	26
4. FD講演会.....	30
5. 卒業時アンケート.....	47

付 録

A. 入試統計（学部・大学院）.....	51
B. 卒業時アンケートの詳細.....	53
C. 全学的就職支援の実施状況.....	55
D. 国際交流.....	57
E. 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入.....	59
F. 高等学校からの訪問.....	61
G. 学生・クラブの表彰.....	61
H. 委員会等協議事項.....	64
I. 『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査の詳細.....	69

編集後記.....	75
-----------	----

第1章 2009年度の主な改革

1. 概要

平成 21 年度の教育改革としては、まず教育に関する競争的資金として教育力向上支援事業が新設された。その目的は、平成 21 年度年度計画において、「ウ 教育の質の改善」の為にとるべき措置として、「学内研究経費の内容を見直し、…途中省略…本学の学士力の育成及び教育力の向上を目的とする教育力向上支援助成費を新設する」とあるように教育力の向上を支援することである。平成 21 年度は 7 件の応募があり、総額 443 万円が 7 件の事業に配分された。次に、昨年度に引き続き今後の全学教育のあり方について検討が行われ、全学教育研究機構教授会でまとめられた原案が教育研究活動委員会で審議され、具体的な改革の一步が実施された。

一方、大学院において、また、平成 18 年度に設置された情報工学部スポーツシステム工学科、デザイン学部デザイン工学科、造形デザイン学科に対応する大学院課程を平成 22 年度から開設できるように、文部科学省に認可申請し、認可を得た。

本年度の職員表彰は、「実践的チームガバナビリティー育成プログラム推進委員会（代表 高井研一）」が推薦され理事長より表彰された。

本学の中期計画の平成 21 年度計画の中で「地域貢献に関する目標を達成するためとるべき措置」として、県内高校との協議を定期的に行い、高校側からの要望等を聴取するとともに、本学の理念及び教育方針の理解を求めることが定められているが、平成 21 年 6 月 26 日、高等学校進路指導担当教員と意見交換が行われ、同 7 月 28 日、岡山県高等学校長協会との懇談会が開催され相互の要望と意見を交換して理解を深めた。

学生支援に関して、平成 20 年度に実施した学生生活アンケートへの対応として実施された施設、設備の改善等とキャンパスマネージャの活動を取りまとめて報告する。

最後に、平成 21 年度に受審した大学機関別認証評価の結果を報告する。

2. 教育力向上支援事業

本年度より新たに設けられた「教育力向上支援事業」を、4 月 1 日より 4 月 17 日までの期間に公募し、7 件の応募があった。本事業については、山田学生部長によるヒアリングを実施し、6 月 11 日の教育研究活動委員会で承認を得て、7 件の事業について総額 443 万円を配分した。採択された事業は次の通りである。

- (1)「看護学科学士教育における看護実践力の評価と向上のための教育の充実ならびに将来構想の模索」代表者：保健福祉学部看護学科 教授 掛橋 千賀子
- (2)「保健・医療・福祉専門職教育のための模擬患者(SP)参加型教育プログラムの展開」代表者：保健福祉学部看護学科 教授 高井 研一

- (3) 「食の安全確保と食育のための栄養学教育に関する研究」代表者：保健福祉学部栄養学科 教授 岸本 妙子
- (4) 「障害者・高齢者の創造的生活を支援する企画及び評価能力を備えた福祉専門職の養成に係る一貫教育の試み」代表者：保健福祉学部保健福祉学科 准教授 中村 孝文
- (5) 「「使える英語」を目指す新たな本学英語教育プログラムの開発」代表者：情報工学部情報通信工学科 教授 桂 宥子
- (6) 「「学士力」の国際的通用性を保証するスポーツシステム工学科教育課程の構築」代表者：情報工学部スポーツシステム工学科 教授 迫 明仁
- (7) 「平成 21 年度グラフィックデザイン実習Ⅲ 学外演習課題演習」代表者：デザイン学部造形デザイン学科 准教授 関崎 哲

3. 全学教育の改革

平成 21 年度は、年度計画にしたがって、全学教育科目のうち「学部教育への準備」カテゴリーの見直しを行った。その過程は以下の通りである。

第 1 回の全学教育研究機構教授会において、このための作業部会を設置し、次回教授会までに原案を提出することが決定された。

各学部 1 名及び機構長からなる作業部会は、それぞれの学部の意向をふまえつつ、検討を重ねた。見直しの方向としては、専門分野への準備的科目となりがちなこのカテゴリーの科目に、全学教育としてよりふさわしい、一般教養科目的性格を与えるというものであった。

こうして部会は、第 2 回教授会（平成 21 年 8 月 6 日開催）において、以下の原案を提示した。

- 1) 「化学Ⅰ」を「化学の世界」に、「化学Ⅱ」を「基礎有機化学」に、それぞれ名称変更する。
- 2) 「生物Ⅰ」を「生物学の世界」に、「生物Ⅱ」を「基礎生物学」に、それぞれ名称変更する。
- 3) 物理学の分野に、新たに「物理学の世界」を加える。

これらの名称変更ないし新設のうち、「の世界」と銘打った科目は、とりわけ教養科目的な性格を持った授業とすることが意図されている。

また、カテゴリー内の全分野に見直しが及んでいないのは、ある特定分野に関しては専門科目を学ぶための当然の準備的科目であるという性格は崩せないとの意見が寄せられ、その場合はそれにしたがうこととしたためである。

以上の案について協議した結果、1),2)についてはそのまま了承されたが、3)については情報工学部の方で十分な審議を尽くした後に最終的な形を早急にとりまとめ、その協議結

果を教授会の最終決定とすることとした。

その協議の結果、

3) については、「物理学の世界」を新設するとともに、現行の「物理学Ⅰ」を「基礎力学」に、「物理学Ⅱ」を「基礎電磁気学」に、それぞれ名称変更し、「物理学Ⅲ」は廃止と決定した。したがって全体としての最終案は以下の通りとなった。

- 1) 「化学Ⅰ」を「化学の世界」に、「化学Ⅱ」を「基礎有機化学」に、それぞれ名称変更する。
- 2) 「生物Ⅰ」を「生物学の世界」に、「生物Ⅱ」を「基礎生物学」に、それぞれ名称変更する。
- 3) 「物理学の世界」を新設するとともに、「物理学Ⅰ」を「基礎力学」に、「物理学Ⅱ」を「基礎電磁気学」に、それぞれ名称変更し、「物理学Ⅲ」は廃止する。

この案を、第5回教育研究活動委員会（平成21年9月3日開催）に報告した。そこでの協議の結果、一部修正（より入門的性格を持たせるために「物理学の世界」の名称を「物理の世界」とする）を経て、了承された。

4. 大学院長期履修学生制度の発足

標準修業年限を超えて一定の期間にわたる計画的な教育課程の履修を行うことを目的に定めた、大学院長期履修制度により、保健福祉学研究科大学院生3名、情報系工学研究科大学院生1名の計4名が平成21年4月から3年間の履修期間が許可された。

5. 職員表彰

平成21年10月1日、公立大学法人岡山県立大学職員就業規則に基づき制定された岡山県立大学職員表彰規程により、「実践的チームガバナビリティー育成プログラム推進委員会（代表高井研一）」が表彰された。

本推進委員会は保健福祉学部3学科及びデザイン学部造形デザイン学科の教員によって組織され、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」として、本学において初めて採択された教育改革プログラム事業を、平成18年度から3年間にわたり実施した。本プログラムは「教育システムの構築と運営」「教育効果」「情報発信と教育成果の社会への還元」の3点について重点的に取り組まれた。

「教育システムの構築と運営」では、領域横断型プログラムの採用により、従来の専

門教育システム（学科縦割りの組織，専門領域内に限定された教育カリキュラム）では成し得なかった，複数学科の教員による有機的教育チームの形成と，それによる複合的な教育システムの構築可能性に一定の示唆を与えた．また，大学外の資源を積極的に導入することで，それを教育化し，活用するための新たな教育方法への示唆が得られた．

「教育効果」としては，問題基盤型教育の採用により，学生の問題発見・解決能力の向上に加え，高いチームワーキング能力の獲得と保健福祉医療環境に関する意識改革に貢献できた．学生や臨床メンターに対するアンケートでは，プログラムの実施前後で連携に対するデメリットや困惑感が低下し，チームパートナーシップ，問題発見・解決能力，調整能力，情報伝達・共有能力の育成のすべての項目において，その評価は2.8点～3.3点（4点満点）と高く評価されていた．

「情報発信と教育成果の社会への還元」としては，間接的には，高いチームガバナビリティ能力を有する人材を専門職域に送り出せることであるが，より直接的には，演劇公演を通じた保健福祉医療情報の地域社会への啓蒙活動が挙げられる．とりわけ「食育」を中心とした演劇公演は地方新聞紙にも複数回掲載され，大学内の教育資源を積極的に地域に還元できた．

以上，本推進委員会の業績は学生への教育的効果，地域社会への成果還元のみならず，本学における組織化された教育システムのあり方や外部資金獲得に対する意識向上，さらには対外的視点からみた本学の知名度の向上や姿勢を顕著に示したものであり，高く評価された．なおその成果は，平成18年度「文部科学省 現代的教育ニーズ取組支援プログラム」実践的チームガバナビリティー育成教育実績報告書（平成21年3月岡山県立大学保健福祉学部 発行責任者 高井研一）としてまとめられた．

表彰式は理事等の同席のもと理事長室で行われ，三宮理事長から表彰状と記念品が授与された．三宮理事長は，「全国レベルでの取組みであり，学生への教育効果のみならず，本学の知名度の向上や教育理念を具現化したものであり，本学の名声を高めた」と感謝の言葉を述べ，功績を称えた．



6. 学生支援（学生生活アンケートへの対応）

学生の生活支援に関するニーズを的確に把握し、大学運営に適切に反映させるため、平成16年度から2年毎に学生生活に関するアンケートを実施している。

平成21年度は、平成20年10月に実施したアンケートの結果を踏まえ、必要な施設・設備の充実や制度の改善に取り組んだ。

また、アンケートの結果を学生にフィードバックするため、マークシートによる設問については学生向けホームページに取りまとめ結果を掲載するとともに、学生生活全般に関する自由記述アンケートについては平成21年7月に学生に対する報告会を開催し対応状況等を説明した。

平成20年度学生生活アンケートにおける要望等に対する主な対応状況

学 生 の 意 見	対 応 状 況
<p>【施設整備関係】</p> <p>○野球場・グラウンド周辺にトイレを設置して欲しい。</p> <p>○野球場のフェンスを高くするなど学外への飛球防止措置を講じてほしい。</p> <p>○学内表示がわかりにくい。</p> <p>○学内に照明をつけて欲しい。 夜暗い。</p> <p>○保健福祉学部棟裏の駐車場への道を舗装して欲しい。</p> <p>○放置自転車等を撤去してほしい。</p> <p>○図書館が暑い。</p> <p>○食堂等に電子レンジを設置してほしい。</p>	<p>21年度に陸上競技場南側に屋外トイレを新設した。</p> <p>22年度の夏季休暇中の完成を目途に野球場及びグラウンドの東側に飛球防止のための防球ネットを設置する予定で準備を進めている。</p> <p>21年度に学内サインを新たに25箇所に設置した。</p> <p>学内の夜間の安全確保のため、20年度に西グラウンド横駐車場への通路に外灯を設置したほか、21年度にデザイン学部棟西側周辺部に外灯を増設した。</p> <p>20年度に歩行者の通路部分を舗装し、雨天時等の通行性を改善した。</p> <p>22年度前期限内に対応するように準備を進めている。</p> <p>館内の冷房効果が高まるように、20年度、図書館の東・南・西の窓ガラスに遮光塗料を施すとともに21年度には1階窓側に扇風機を設置した。</p> <p>キャンパス・マネージャーからも要望があり、20年度に学生会館2階のラウンジに電子レンジ1台を設置した。</p>
<p>【履修関係】</p> <p>○履修登録時間が決められており不便である。</p>	<p>利便性の向上を図るため、20年12月に履修登録が出来るパソコンを保健福祉学部及びデザイン学部の各</p>

<p>○履修登録のパソコンの入力方法がわからない。</p> <p>【就職支援関係】</p> <p>○就職活動の相談を親身になってやって欲しい。</p> <p>○就職情報をもっと提供して欲しい。就職に関する情報提供施設を充実して欲しい。</p> <p>○就職ガイダンス・セミナーを増やして欲しい。また、就職ガイダンスの時期を早めて実施して欲しい。</p> <p>○公務員講座・ガイダンス等を充実して欲しい。</p>	<p>学科を増やした。また、21年度前期は5限までの登録時間を6限までに延長した。</p> <p>21年度は、マニュアルの配布に加え、履修期間中、履修登録の操作指導員を配置する時間帯を設けた。</p> <p>20年10月、就職支援を強化するためキャリアカウンセラーの資格を有する専任の就職相談員を新たに配置した。</p> <p>就職資料室の学生利用を学生の利便性を向上させるため20年度の夏季休業中に拡幅工事を行い、配架書類の充実等も行った。</p> <p>21年度は、一部ガイダンスを従来より早期に開催するとともに、ガイダンスの開催回数も増やして実施した。また、ウェブを使った就職模擬試験も新たに実施した。</p> <p>21年度は従来から開催していた公務員ガイダンスに加え、公務員模擬試験を学内において初めて実施した。</p>
---	---

7 キャンパスマネージャーの活動

本学には、広く学生の自主的建設的な意見を大学運営に反映させるため、キャンパスマネージャー（学生生活企画提言委員）の制度が設けられており、平成21年度は23名の学生が学長から委嘱されている。活動は学生部長の指導に基づき、学生生活全般にわたる企画、提言を行っている。

[キャンパス・マネージャーの活動状況]

日 時 (場 所)	出席者等	内 容
H21. 6. 4 12:00～13:00 (本部棟2階 大会議室)	キャンパスマネージャー21名, 学生部長及び事務局3名	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンパスマネージャーへ辞令を交付し、事務局からキャンパスマネージャーの活動内容について説明を行った。 ・夏季に韓国又松大学校から学生を受け入れる日本語学・文化研修プログラムのなかで計画している本学学生との交流会について意見交換等がなされた。その結果、キャンパス・マネージャーが主体となって、日韓双方の食文化をテーマとした交流イベントを開催することが決定された。（ただし、新型インフルエンザの影響で受入計画は中止となった。）
H21.10. 6 12:00～13:00 (本部棟2階 大会議室)	キャンパスマネージャー21名, 学生部長及び事務局7名	<ul style="list-style-type: none"> ・本学の語学・文化研修制度及び学内掲示板について改善に向けた意見交換等が行われ、事務局担当班において今後の改善に向けて検討することとなった。 ・卒業記念品の品目について意見交換を行い、21年度卒業生の記念品選考の参考とした。 ・学内標識について学生の視点からの意見聴取を行い、学内サイン設置にあたっての参考とした。

H21.12.3 13:00～14:10 (学内)	キャンパスマネージャー8名, 事務局1名	・学内安全点検ツアー（学内で不便・危険な箇所の実地調査）を実施し、学生からの意見をもとに下記事項などについて対応・改善することとした。 ・特殊簡易公衆電話機の設置 ・共通棟（南）1階へのソファの設置 ・放置自転車等の撤去（H22度実施予定）
H21.12. 4 17:00～18:00 (学内及び大学周辺)	キャンパスマネージャー3名, 事務局2名	・夜間に学内及び大学周辺の安全点検ツアーを実施し、学内の照明計画の見直しや照度が低い箇所への外灯の増設を行ったほか、学外の照度改善については総社市へ要望することとなった。 (平成22年2月24日総社市へ要望書提出)
H22. 2.16 12:00～13:20 (本部棟2階 大会議室)	キャンパスマネージャー15名, 学生部長及び事務局3名	・本年度の活動実績について事務局から報告を行い、その後、意見交換等を行った。 －参加学生からの一意見－ 「自分たちが言った意見を大学が聞いてくれるんだと思ってうれしかった。」

8 大学機関別認証評価の結果

本学は、平成 21 年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価を受審した。そのために、評価委員会を中心として2年間にわたり準備作業を行った。

評価結果は、「岡山県立大学は、大学設置基準を始め関係法令に適合し、大学評価・学位授与機構が定める大学評価基準を満たしている」と示され、主な優れた点として次のことが挙げられた。

- 教養教育に相当する全学教育科目を、学ぶ目的に応じて7つのカテゴリーに体系化し、その実施を保障する全学教育研究機構を設置しており、明確な責任体制の下に有効に機能している。
- 教員組織の活性化を図るため、公募制、任期制、学内競争的資金、職員表彰、教員の個人業績評価などを多面的に実施している。
- 平成 18 年度に文部科学省現代GPに採択された保健福祉学部の「実践的チームガバナビリティー育成教育－領域横断カリキュラムと臨床メンターを援用した実践型キャリア教育の試み－」では、保健・医療・福祉の3領域の学生の協働により、異分

野に対する理解と尊敬の心を育むとともに、チームマネジメント能力の育成を図っている。

- 「岡山オルガノン」の構築－学士力・社会人基礎力・地域発信力の融合を目指した教育－（代表校岡山理科大学）が、平成21年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択されている。
- 卒業生の半数程度が岡山県内の企業・事業所等に就職しており、「地域産業の振興への寄与」を謳った大学の目的に沿って、地域人材の確保に貢献している。
- 教員の相互授業参観を全学的に実施し、実施率や参観率が非常に高く、詳細な報告書が作成され、実質的に機能している。
- 大学の教育研究活動や社会貢献活動の状況や成果等を紹介する『大学案内』、『教育年報』、『社会貢献年報』、『教育研究者総覧』等が毎年発行され、大学ウェブサイトにも公開するなど、積極的に学内外に情報発信を行っている。

これらの優れた点は、本学が過去5年間の教育を中心とした改革の方策及びその実施結果を是と評価されたものと理解される。

一方、改善を要する点として、次の1事項が挙げられた。

- 大学院課程の一つの研究科においては、入学定員超過率が高い。

改善を要する点として指摘された事項について、平成22年3月23日に開催された役員会において、保健福祉学研究科博士後期課程保健福祉科学専攻の入学定員3名を5名に改正することが承認された。平成22年6月までに文部科学省への届出を行い、平成23年度入学者から適用することになった。

第2章 FD活動

1. 概要

本学におけるFD活動は、学生による授業評価や卒業時アンケート、教員相互の授業参観と外部講師を招いての研修会の三本柱で展開してきた。授業評価は過去6年間にわたり実施してきたが、評価項目見直しの声が教員から上がり、授業改善に、より役立つ内容の検討に着手した。相互授業参観の実施は全学的に定着してきており、実施の段階から授業改善への取り組みが課題であり、参観後に提出するレポートに授業改善事例の報告を求めるなど、実質化に向かった取り組みを進めた。外部講師を招いての研修会は、昨年引き続き愛媛大学の小林先生にお願いし、より実践的な研修会を開催することが出来た。

本年度初めての取り組みとして教職員を対象とし、本学のFD活動の歩みや授業評価等の活動内容を紹介する講演会を開催した。そこで、本年度実施された認証評価とFD活動との関連性についても、全学評価委員会副委員長の野津教授が講演を行った。こうした講演会を通して教職員からの意見を聴取するとともに、FD活動の理解や協力の促進に努めた。

昨年度からFD部会に授業評価委員会を組み込み、組織的な充実を図ってきた。授業評価や授業参観、外部講師の研修会といった活動を、総合的に計画し実施することが出来たが、授業改善のみならず広く本学のFD活動についての検討が今後の課題である。なお、本年度実施された認証評価で、相互授業参観が高く評価されたことは、教員のFD活動に対する熱意の表れであると言える。

詳細は項目ごとに報告するが、平成22年度は従来の事業を継続すると共に、これまでの実績を踏まえ、本学のFDやFD活動について検討を進めることが課題であると考えている。

2. 授業参観

(1) 平成21年度授業参観の位置づけと目的

昨年度同様、平成21年度の授業参観も、教育内容・方法の質的向上を目指し、かつ公開する教員および参観する教員いずれの希望も尊重する形で相互授業参観を実施した。なお昨年度の授業参観が前期に実施されたことを踏まえ、今年度は後期に設定した。

(2) 相互授業参観の実施方法について

1) 参観授業の開示

全ての専任教員は、公開する授業科目（授業形態は問わない）、公開日、時限を選

定する。ただし、全学教育研究機構を兼務する教員は、全学教育科目を公開する。

2) 参観授業の選択

教員は参観希望授業を選択し、公開教員に申し込む。

3) 実施期日 平成 21 年 11 月 30 日（月）～ 12 月 11 日（金）

(3) 授業参観レポート

授業参観終了後、参観教員は次の 3 項目についてレポートを提出する。なお、レポートは前年度までの形式を踏襲したが、今年度は 3 項目目に変更を加え、授業改善事例とした。

- 1) 当該授業を参観した理由
- 2) 参観して良かった点、気になった点
- 3) 授業改善事例

(4) レポートの活用

(3)の様式で提出されたレポートは、参観を受けた教員に対するフィードバックとして、個別に送付された。また本稿における年度のまとめにも活用し、少し手を加えて引用させていただいている。

(5) 各学部の授業参観実施結果

[保健福祉学部]

① 実施概況

実施概況を表 2.2-1 に示す。平成 21 年 12 月現在の学部教員数は、教授 25 名、准教授 23 名、講師 4 名、助教・助手 17 名の合計 69 名である。授業参観の参加教員数欄の分類法 A と分類法 B はそれぞれ職位による分類および学科内・学科外別となっている。なお「学科内」は公開教員と参観教員の所属学科が同一であることを示す。

② 実施結果

保健福祉学部では教授・准教授を中心に 43 名の教員が授業の公開を行ない、のべ 43 名が参観し (1 教員が複数の参観を行なった場合もそれぞれにつき 1 とカウントした)、内 2 名は他学部・他学科科目を参観している。公開された授業を形態別に整理すると、講義 32 科目、演習・実習 (講義演習複合型含む) 11 科目で、ほとんどが講義形式であった。今回公開を行なわなかった教員の理由に関しては、臨地実習期間と重なっていた等による。

参観科目の選択理由に関して最も多かったのは、「自分の担当科目との関連性の高さ」と

いう回答であった。それとは対照的にごく少数ではあったが、学際的な知見から「異なる専門領域における授業内容への興味関心」という回答も得られている。その他の理由として「科目内容への興味関心」、「授業の展開方法への興味関心」および「学生の学ぶ姿勢・反応の把握」等が挙げられよう。また少数派ではあるが、「多人数クラスの管理運営方法への興味関心」や「臨床経験のある教員の行なう授業への興味関心」という回答も見られた。

つぎに、参観した授業の「よかった点」および「気になった点」に関して、今後各教員の授業改善の一助となる特筆すべきものを、以下の〈授業の展開・指導方法〉、〈配布資料・教材提示〉、〈教員の態度〉、〈その他〉の4つのカテゴリーに従って分類しまとめた。

◎ よかった点

〈授業の展開・指導方法〉

1) グループワークに関して

- ・ グループワークの結果を学生自身に自分のことばで表現させ、板書させていた。
- ・ 教員が学生のグループ発表の内容を板書し、ほかの学生の意見を引き出しながら、関連知識を再確認させていた。
- ・ 同じ学生発表者が続けて2回発表する方式（発表1回目→質疑応答→発表2回目）は、学生がテーマを深くとらえる方法として評価できる。

2) 授業展開上の工夫

- ・ 授業の導入に予習確認テストや前週の学習内容の確認 Q&A、授業の終了時に復習テストやコメントシートの記入を行ない、学習の定着を計る工夫が見られた。
- ・ 90分間の授業に2〜3本の学習内容の柱を立て、それに合った教材（視覚教材、音声教材およびプリント教材）を多様に活用し、学生の集中力の維持を図る工夫が見られた。
- ・ 現場の方をゲストスピーカーとして招き、より具体的に学生に学習内容を提示する工夫が見られた。
- ・ 講義と実習の関連や、領域間の関連を意識させ、学生の知識が断片的にではなく、構造的につながるように指導されていた。

〈配布資料・教材提示〉

- ・ 錯覚・主観的輪郭に関する資料を用い、学生が実際に「見て・感じ・気づく」授業であった。
- ・ 学生の作成したワークシートをプリント配布し、学習の共有と気づきがうながされていた。
- ・ 板書等により「学習内容の図式化」を行ない、理解しやすいようにしていた。

〈教員の態度〉

- ・ 受講者数が200名近くのにのぼり、教員はクラス管理にかなり配慮していた。まじめに履修する学生の妨げになる行為をくりかえし諫めていた。

- ・ 適度な間をとり、学生の反応や理解度を把握し、また机間巡視しながら、各学生の学習状況を把握する努力がなされていた。

- ・ 学生が自由に質問できる和やかな学習環境が作り出されていた。

〈その他〉

- ・ 学生の学習状況（ノートの取り方、資料の整理の仕方等）を見ることができたのはよかった。

- ・ 多人数クラスでの出席カードの点検には毎回相当の労力が要ると思われるが、どのように処理しているのか知りたい。

◎ 気になった点

〈授業の展開・指導方法〉

- ・ 昨今の学生の集中力の持続状況から見て、単調なくりかえしや教員側からの一方通行の講義では、学生の学習効果が得られるとは考えにくい。講義の展開にかなりの工夫が必要ではないだろうか。

〈配布資料・教材提示〉

- ・ パワーポイントの字が小さく、最後尾あたりの席からは見えにくかった。プリントとして同じスライドが配布されていたが、学生がどのスライドか探すうちに次のスライドに進んでいる時があった。

〈学生の態度〉

- ・ 1限目の講義で遅刻する学生が非常に多かった。

- ・ 居眠り・私語・中座する学生が見られた。

- ・ 調理実験中にも関わらず、髪の毛のまとめ方に問題がある、あるいは指輪をしている学生や携帯電話を使ってメールを送信する学生がいた。

- ・ PC設置教室であったため、授業に関係のないHPを見る学生がいた。

〈その他〉

- ・ 1教員では目が行き届きにくく、管理のむずかしい多人数クラスでは、TAを補助としてつける等の措置が必要ではないか。

- ・ 教材提示のための機器に不備が感じられた（映し出される文字が小さすぎる等）。

本年度でFD活動の一環として行なわれる授業参観も3年目を迎えた。過去の授業参観等を通し、各教員が自らの授業をどのように省み、改善への努力を重ねているのかという、授業参観そのものの成果を問うという目的もあり、今年度より参観レポートに改善事例を記載してもらうこととした。上にまとめた参観して「よかった点」と重複する内容は除き、以下に〈授業の展開・指導方法〉、〈配布資料・教材提示〉および〈学生とのコミュニケーション〉の3つのカテゴリーに分類し、具体的な改善事例をまとめる。

〈授業の展開・指導方法〉

- ・ 語学は予習を前提とした授業であるため、授業開始前に机間巡視し、学生ひとりひとりに対して予習状況のチェックを行なう。
- ・ 自由献立の最後の実習で、各班の献立が観察・試食できるように、試作品の観察方法を工夫した。
- ・ 教員の現場経験を活かす、あるいは教員の見聞した事例を取り入れ、授業内容を検討し直す。
- ・ こまめに机間巡視し、個別指導に努める。
- ・ 参考資料をまとめて提示するのではなく、授業のなかでその都度紹介する。
- ・ 座席指定により、組織的に演習に取り組みせる。
- ・ 学生参加型のタスクをませながら、バランスよく講義を行なう。
- ・ 講義内容は学生の理解を第一に考えつつも、かならずしも理解できるレベルに留まるべきではなく、やや発展的な内容も盛り込むようにしている。

〈配布資料・教材提示〉

- ・ 実物提示や映像等ビジュアルエイドを活用し、学生の興味関心を起こすように努める。
- ・ 1枚に授業15回分のコメントが記入できる用紙を用意し、出席状況・関心度・理解度をセメスターでトータルに把握できるように工夫した。教員と学生のコミュニケーションを図るカードとしても機能し、授業の連続性を学生に理解させるのに役立っている。

〈学生とのコミュニケーション〉

- ・ 学生の私語を減らすように働きかける。
- ・ 「コミュニケーションティーチング演劇練習」の授業を参観し、講義形式の授業ではあっても、学生とのコミュニケーションを図ることの必要性を強く感じ、実践している。

③ まとめ

- 1) 特別な理由を擁しないかぎり、ほぼすべての教授・准教授を中心に授業公開の申し出があったにも関わらず、昨年度の55名に比べ、今年度の参観教員数は約10名以上の減となったのは残念であった。3年目に入り、授業参観も定着した反面、実施の意義を感じられなくなった教員もいるのではないだろうか。
- 2) 「よかった点」の記述に関しては、昨年度とほぼ同じような内容で、学生の集中力を維持させ、注意を引きつけるために、各教員が授業の構成や配布資料の作成に工夫を凝らしているのがわかった。「気になる点」では、教員の授業内容や進度によるものも事由として挙げられているが、これまでも幾度か取り上げられている問題＝学生の受講態度（居眠り・中座・私語・携帯電話の使用）に注目すべきではないだろうか。特に受講者が100名近くに達する、あるいはそれ以上のクラス管理運営の方法について

は改めて全学的に取り上げ、対策をとるべきだと考える。

- 3) 今年度の授業参観レポートから各教員に「授業改善事例」の報告をお願いしたが、授業参観を行っていない教員からは回答を得るすべもなく、また参観には参加したが、この項目に関しては空欄のまま提出されたものが多かった。自己の授業を改善されたものとして報告することに抵抗があるとも解釈できるが、わずかな改善にも役立つのであれば、本事例報告の意義は十分果たされるのであるから、次年度以降ひとりでも多くの教員からの報告を望みたいところである。また報告を寄せられた教員のことばから、さまざまな形で学生の理解・定着度を把握するため、あるいは主体的な学びを導く学習環境作りのために学生とのコミュニケーションを重視したいという心情が読み取れ、講義演習の別を問わず、インタラクティブな授業の展開がより一層期待されていると言える。

表 2.2-1 公開授業と参観の概要(保健福祉学部)

公開対象の授業科目			参観教員数						
科目	授業形態	公開教員	計	分類法A				分類法B	
				教授	准教授	講師	助教・助手	学科内	学科外
【栄養学科教員による科目】									
栄養学総論	講義	木本真順美	0					0	0
環境の科学 ※	講義	辻英明	1		1			1	0
内科学	講義	福島光夫	2	1	1			2	0
応用栄養生理学	講義	高橋吉孝	1	1				1	0
食糧を考える ※	講義	岸本妙子	1			1		1	0
調理学実験	実習	山下広美	2				2	2	0
みじかなバイオテクノロジー ※	講義	山本登志子	4	2	2			4	0
栄養教育プログラム論	演習	川上貴代	1		1			1	0
健康情報演習	演習	川上祐生	1	1				1	0
小計			13	5	5	1	2	13	0
【看護学科教員による科目】									
看護学基礎論	講義	村上生美	2	1	1			2	0
臨床病態学Ⅰ	講義	森將晏	2		1		1	2	0
老年看護Ⅱ	講義	太湯好子	1				1	1	0
地域看護学概論	講義	二宮一枝	1				1	1	0
小児看護学Ⅰ	講義	沖本克子	1		1			1	0
看護学方法論Ⅲ	講義	肥後すみ子	0					0	0
国際保健・看護論	講義	石村久美子	0					0	0
看護学方法論Ⅳ	講義・演習	荻あや子	0					0	0
基礎英語Ⅱ ※	講義	杉村寛子	2	1				1	1
家族看護学	講義	岡崎愉加	1		1			1	0
精神看護学Ⅰ	講義	渡邊久美	1		1			1	0
母性看護学Ⅱ	講義	重西柱子	0					0	0
小計			11	2	5	0	3	10	1
【保健福祉学科教員による科目】									
知的発達障害論	講義	中嶋和夫	0					0	0
障害行動計測理論・障害行動計測評価演習	演習	田内雅規	0					0	0
高齢者保健福祉論	講義	香川幸次郎	1				1	1	0
障害者福祉論Ⅰ	講義	百本幸司	1	1				1	0
音楽の鑑賞 ※	講義	岡崎順子	1		1			1	0
形態別介護技術Ⅲ	講義	谷口敏代	2		1		1	2	0
社会福祉発達史Ⅱ	講義	井村圭壯	0					0	0
保健福祉基礎ゼミ	講義	中村光	2	1	1			2	0
英会話Ⅱ ※	演習	星野裕子	2			1	1	2	0
障害行動評価演習	演習	中村孝文	0					0	0
公衆衛生	講義	藤井保人	2	1		1		2	0
養護内容	演習	中野菜穂子	1		1			1	0
社会福祉援助技術論Ⅴ	講義	村社卓	0					0	0
社会福祉援助技術演習Ⅳ	演習	近藤理恵	1				1	1	0
精神保健福祉論	講義	坂野純子	0					0	0
高齢者保健福祉論Ⅲ	講義	筒井澄英	0					0	0
教育心理学	講義	京林由季子	1		1			1	0
児童福祉論	講義	金潔	2		2			2	0
基礎技能Ⅱ 幼児教育	演習	新山順子	0					0	0
心理学入門 ※	講義	樂木章子	1				1	1	0
保健福祉学入門ゼミ	演習	坪井一伸	0					0	0
介護技術演習Ⅱ	講義・演習	原野かおり	2				1	1	1
小計			19	3	7	2	6	18	1
総計			43	10	17	3	11	41	2

(注) ※印は全学教育科目

[情報工学部]

① 実施概況

実施概況を表 2.2-2 に示す。平成 21 年 12 月現在の学部教員数は、教授 22 名、准教授 19 名、助教 14 名の合計 55 名である。同表では授業科目を I～VI の 6 つの群に分類している。I 群は理系基礎科目である数学と物理、II 群はソフトウェア系科目、III 群は基礎工学系科目、IV 群は実験・演習科目、V 群は専門を深化させる科目または応用的な色彩が濃い科目、VI 群は「学部教育への準備」のカテゴリーを除く全学教育科目並びに教職に関する科目である。対象欄は受講学生の所属学科を略称で記している。参加教員数欄の分類法 A, B はそれぞれ職位、学科内外によるものである。ここで、学科内、学科外とは公開教員と参観教員の所属学科がそれぞれ同じ、異なることを意味している。

②実施結果

公開期間中に担当授業のない 3 名を除く 52 名が 46 科目を公開した（同一科目名で複数クラス開講の場合は 1 科目とカウントした）。参観者数は 36 名であった。過去 2 年に比べて参観者数は減少した。群別の参観者数を同じ後期に授業参観を実施した平成 19 年と比較すると、次表に示すとおり、今回は II 群のソフトウェアと III 群の基礎工学が減少した。授業形態では講義の参観者が 26 名、実験・演習の参観者数が 10 名である。そして、公開教員と参観教員の所属が同一学科であるものが 22 名である。IV 群の実験・演習では学科外の参観者数が多かった。

	平成 21 年 12 月	平成 20 年 6 月	平成 19 年 11 月
I 群：数学と物理	5	1	8
II 群：ソフトウェア	4	5	11
III 群：基礎工学	3	12	12
IV 群：実験・演習	8	4	6
V 群：専門的教育	8	23	10
VI 群：全学教育	8	9	6
合 計	36	54	53

参観科目の選択理由で代表的なものは次のとおりであった。I 群：自分の担当している専門科目の基礎科目である。II 群：プログラミング演習の担当者として参考にしたい。III 群：自分の担当科目と関連が深い。IV 群：実験・演習に関連する講義を担当している。他学科の実験・演習を参考にしたい。V 群：類似または関連科目を担当している。VI 群：授業内容を理解しやすい。

参観レポートに示された事項をまとめると、参観して良かったことが 81 件、気になったことが 29 件であった。また、今回は以前の授業参観で得られたことを自身の授業に生かした事例を集めたが、これについては 22 件であった。

これらの中で、良かったことの例を講義と実験・演習に分けてまとめる。まず、講義については次のとおりである。

- 板書すべき事項と口頭説明で済ます事項が事前によく練られており、板書が要領よくまとめられている。
- 話し方がゆっくりで明瞭である。
- 適宜、問題演習を実施することによって、学生の理解の定着を図ろうとしている。
- 昨今話題を取り入れて、学生の興味を引いている。
- 具体的な数値例をあげて、抽象論に終始しないようにしている。
- 実験科目で実際に学生が体験したこととの関連を説明し、理論の具体的な適用例を示している。
- ビデオ等の視覚的な教材を効果的に使っている。

次に、実験・演習において良かったことをあげる。

- テキストに従って単純作業をするのではなく、やや高度で自由度の高い課題を設定して、学生の意欲の向上を目指している。
- スライドを効果的に使用して、実験内容を直感的に把握できるように工夫されている。
- 複数の担当教員の役割分担が明確化されている。
- 能力別のグループ編成を取り入れ、苦手な学生には手厚い指導をして、落ちこぼれることを防止している。
- 巡回と学生への問いかけを怠らず、学生が常に緊張感を持って実験に取り組めるような雰囲気を作っている。

一方、気になったことは次のとおりである。

- テキストにそった丁寧な説明がなされていて、それ自体悪いことではないが、具体的な事例をあげるなどして、学生の興味を引くように心がけると、より魅力的な授業になるのではないかと感じた。
- 重要点を強調するなど、メリハリをつけた方がよい。
- 口頭説明が多い。適宜板書する方がよい。
- 板書の文字が大きくて読みやすいが、頻繁に消していたので、学生はノートを取り辛いようであった。

- 授業内容が難しすぎると感じた。
- 後ろの方に座る学生が多いので、前に座るように促すべきである。
- 居眠り、遅刻、途中退室する学生が目についた。
- 受講者に対して、教室が広すぎる。
- 全学教育科目によく見受けられることであるが、受講者数が多すぎる。
- 実験で、進行の遅いグループへの対応など時間外での教員への負担が大きいのではないかと思われる。

今回の参観レポートでは、過去の授業参観で得られたことを自身の授業に生かした事例をあげてもらった。それらをまとめたものを次に示す。

- 丁寧な板書とゆっくりと話すことを常に心がけている。
- 重要な部分をゆっくりと繰り返し話して、強調する。
- 説明しすぎない。細かいことを早口で説明されても学生は理解できない。
- 学生が板書を書き写す時間を確保する。
- 概要から徐々に細部に入っていくなど話の流れを考える。
- 小テストを実施して、知識の定着を図っている。学生の理解度を把握するのにも役立つ。
- 厳格に出席を取ることを心がける。
- スライドに頼り切るのではなく、スライドを効果的に授業に取り入れる。

③ まとめ

- 1) 過去2年に比べて、参観者数が減少した。同時期に実施した2年前と比べるとII群のソフトウェアおよびIII群の基礎工学で参観者数の減少が顕著である。3年間ほぼ同様の参観形態が続いているので、実施方法の再検討をすべき時期に来ているのかもしれない。
- 2) 参観レポートでは、前回と同様、具体的な記述が多かった。教室や受講者数に関する問題は、必ずしも教員の責任とは言えないが、授業環境の改善に向けた取り組みも重要であると思われる。
- 3) 過去の参観で得られたことを自身の授業に生かした事例では、特殊な事例はなく、普段の授業で当然行われているべきことが多かった。人の振り見て我が振り直せというがごとく、授業参観して改めて気付かされることもあり、そういう意味においても授業参観は各教員に良い機会を与えていると考えられる。

表 2.2-2 公開授業と参観の概要 (情報工学部)

公開対象の授業科目					参観教員数					
群	公開科目名	形態	公開教員	対象	計	分類法A			分類法B	
						教授	准教授	助教	学科内	学科外
【情報工学部教員が担当している授業】										
I	線形代数学II	講義	小野	通, ス	0	0	0	0	0	0
	解析学II	講義	小松	通	2	2	0	0	1	1
	解析学II	講義	高橋	シ	2	1	1	0	2	0
	物理学II	講義	福嶋	シ	1	0	0	1	1	0
小 計					5	3	1	1	4	1
II	プログラミング言語II	講義	國島	通	2	0	0	2	2	0
	ソフトウェア設計	講義	但馬	シ	2	0	0	2	2	0
小 計					4	0	0	4	4	0
III	電子回路	講義	大久保	ス	0	0	0	0	0	0
	離散数学	講義	小野	通, ス	1	1	0	0	1	0
	電気回路I	講義	若林	通	1	0	1	0	1	0
	計算機工学入門	講義	横田	通	1	0	1	0	0	1
	力学II	講義	市川	シ	0	0	0	0	0	0
小 計					3	1	2	0	2	1
IV	情報通信工学実験IIIA	実験	荒井	通	1	0	1	0	1	0
	情報通信工学実験IIIB	実験	山崎	通	1	0	0	1	0	1
	情報通信工学演習B	演習	武次	通	0	0	0	0	0	0
	ソフトウェア演習I	演習	天寄, 目木	シ	1	0	0	1	0	1
	ソフトウェア演習II	演習	横川	シ	0	0	0	0	0	0
	システム創造プロジェクト	実験	神代, 大西, 芝, 福田	シ	3	0	1	2	0	3
	システム工学演習II	演習	山内 仁	ス	0	0	0	0	0	0
	システム工学実験	実験	松井, 井上	ス	2	0	1	1	1	1
	サイエンスセミナーII	演習	大山	ス	0	0	0	0	0	0
小 計					8	0	3	5	2	6
V	トピック理論	講義	稲井	通	0	0	0	0	0	0
	半導体デバイス	講義	森下	通	0	0	0	0	0	0
	波動情報システム	講義	岸原	通	2	1	1	0	2	0
	通信方式II	講義	榊原	通	0	0	0	0	0	0
	光エレクトロニクス	講義	坂本	通	0	0	0	0	0	0
	論理回路	講義	早瀬	シ	0	0	0	0	0	0
	数理計画学	講義	金川	通	0	0	0	0	0	0
	電子情報回路	講義	佐藤	シ	0	0	0	0	0	0
	熱力学	講義	中川	シ	0	0	0	0	0	0
	信号処理	講義	渡辺	シ	0	0	0	0	0	0
	数理計画法	講義	亀山	シ	1	0	1	0	1	0
	加工と生産	講義	加藤	シ	0	0	0	0	0	0
	材料力学II	講義	尾崎	シ	0	0	0	0	0	0
	制御工学II	講義	忻	通	0	0	0	0	0	0
	工業材料	講義	末岡	シ	1	0	0	1	0	1
	社会行動科学	講義	犬飼	ス	0	0	0	0	0	0
	基礎運動学	講義	辻	ス	0	0	0	0	0	0
	通信伝送工学	講義	山北	通	2	1	0	1	1	1
	機構学	講義	西山	シ, ス	2	1	1	0	1	1
	計測工学	講義	濱田	ス	0	0	0	0	0	0
	流体工学	講義	野津	シ	0	0	0	0	0	0
小 計					8	3	3	2	5	3

表 2.2-2 公開授業と参観の概要 (情報工学部) (前頁の続き)

公開対象の授業科目					参観教員数					
群	公開科目名	形態	公開教員	対象	計	分類法A			分類法B	
						教授	准教授	助教	学科内	学科外
【情報工学部教員が担当している授業(続き)】										
VI	基礎英語	演習	桂	全	0	0	0	0	0	0
	スポーツII	講・実	平田, 後藤, 越川	全	0	0	0	0	0	0
	心理学入門	講義	迫	全	4	2	1	1	4	0
	脳と身体の科学	講義	柳原	全	1	1	0	0	1	0
	教育課程論	講義	福本	栄	0	0	0	0	0	0
小 計					5	3	1	1	5	0
情報工学部が担当している授業の合計					33	10	10	13	22	11
【保健福祉学部教員が担当している授業】										
IV	音楽の鑑賞	講義	岡崎(順)	全	1	0	1	0	0	1
	基礎英語II	演習	杉村	全	1	1	0	0	0	1
小 計					2	1	1	0	0	2
【デザイン学部教員が担当している授業】										
VI	基礎韓国語II	演習	朴	全	1	0	1	0	0	1
小 計					1	0	1	0	0	1
総 計					36	11	12	13	22	14

対象

通：情報通信工学科 シ：情報システム工学科 ス：スポーツシステム工学科
 栄：栄養学科 全：全学科

[デザイン学部]

① 実施概況

デザイン学部の教員総数は、授業参観を実施した平成21年12月現在、42名（昨年度より1名減）。内訳は、デザイン工学科が、教授7名（うち休職1名）、准教授6名、講師2名、助教3名、助手1名の計19名、造形デザイン学科が、教授8名、准教授8名、講師3名、助教2名、助手2名の計23名である。実施期間中に授業を担当する助教職以上の教員は35名で、このうち31名、すなわち授業担当者の88.6%が、授業を公開した。実施状況の詳細は表2.2-3のとおりである。昨年度の授業公開が100%であったのに対して11.4ポイントの落ち込みであるが、公開期間を避けて出張等の日程調整をするなどの参加に対する積極性・意気込みが、実施回数を重ねることにより若干減退したようにも推測される。

公開・参観の原則は従来どおり、授業を担当する助教以上の教員が1科目以上（1コマ以上）を公開し、全教員が1科目以上を参観するものであったが、複数時間（2日もしくは2コマ）を公開した教員が5名あった。昨年度実施された複数担当者が担当する科目の公開、1教員による2科目の公開、1教員による2科目の参観は、今年度みられなかった。授業公開への参加率は、上述のとおり88.6%であったが、授業参観への参加率は、実人数

ベースで 57.1%にとどまり、前回の 79.1%、前々回の 85.4%をかなり下回った。細かくは、教授 50.0%、准教授 57.1%、講師 60.0%、助教 80.0%、助手 66.7%であった。(今回は、忌引・入院等のやむを得ない事情による不参加もあったが、前回の参観への参加率は、教授 73.3%、准教授 83.3%、講師 71.4%、助教 100.0%、助手および教務職員 80.0%で、すべての職位において低下した。)

デザイン学部においては、公開科目中に実習科目(4 コマ連続)の占める割合が他の 2 学部に比べて高いため、従来同様、実習科目には多くの参観者を得られなかった。(実習科目は 7 科目公開されたが、参観は、2 科目 2 名に留まった。)最も多く参観者を集めた科目は、後期第 1 回目の授業を公開した北山准教授担当の「デザイン史 II」(講義科目、参観者 5 名)、次いで朴助教担当の「基礎韓国語 II」(演習、3 名)であった。その他はすべて、1 ないし 2 名の参観に留まった。全く参観者を得なかった科目は 16 科目で、全公開科目(31 科目)の半数を超えた。

なお、他学部教員の担当科目を参観したデザイン学部教員は 1 名、他学部からデザイン学部教員担当科目を参観した教員は 2 名(いずれも語学系の科目を参観)であった。

② 実施結果

参観した授業を選んだ理由は、これも前回同様、おおむね次の 4 点に集約することができる。

第 1 点は、授業内容に対する興味で、参観者が当該授業と同様、あるいは異なる内容の授業を担当している。具体例には、「類似する内容がある為」、「自分の講義への改善のためのフィードバック」、「第二外国語を担当するものとして、他の外国語の授業に興味がある」。

第 2 点は、授業担当者に対する興味、あるいは授業担当者の能力に対する高い評価によるものである。具体例には、「担当教員を知的に(また人間的に)日頃から尊敬しているため」、「プレゼンテーションが上手な先生であると評判であるから」、「一昨年も拝見し、大変参考になったため」。

第 3 点は、参観者が自分の授業に資するものを求めて参観したとする回答で、授業内容そのもののほかに、学生の受講態度・能力がみたい、授業展開を参考にしたい、などがあった。具体例には、「学生との接し方を観察したいと思ったため」、「本学の学生の英語スキルについて興味があるため」、「講義系の授業でのテキスト(教科書)の使い方についても学びたい」。

第 4 点は、消極的な理由で、参観者の日程(空き時間)の都合によるものである。「参観可能な時間帯にあったこと」、「参観できる時間が他になかった」。

参観した授業の良かった点は、授業個々の内容、参観者個々の興味に直結しており、これを分類して集約することは難しいが、前回、前々回同様に、授業準備の周到さや学生の積極的な授業参加への働きかけを良かったとする評価が目立った。具体例には、「厳選され

た資料配布とプロジェクター投影の講義形式であるため、見やすく、かつ、要点が大変理解しやすいように工夫されていた」、「学生ごと進度の異なるなかでの授業マネジメントで苦労があったかと思うが、教卓での個別アドバイスと教室巡回を組み合わせ、適切なアドバイスを心がけていた」。

気になった点についての指摘は、前回に比較して量的には減った様にみうけられる。特に、前回みられた、授業公開・参観を新任教員に対する研修の一環とみなす立場からの、率直かつきびしい批判はなかった。具体例には、「スライドが終わった時点で、部屋の照明をつけて、学生と目をあわせながらお話をされれば、さらに学生の心にひびくのではないかと思いました」、「最後に次週のテーマの提示があり、つながりを持たせている点は参考になったが、その前に、本日の話全体を復習がてら、まとめて聞きたかった」、「海外（韓国）からの転学生については、ノートテイキングがついていけているか確認を要するかもしれない」。

③ まとめ

デザイン学部においては、前後期の火曜日と水曜日および前期の金曜日の3限目から6限目にかけて、各コース名を冠する4コマ連続の実習が設定されており、これを担当する教員や、実習補助にあたる助教・助手にとっては、参観授業選択の自由度を狭められており、このことは例年の避け難い事情としてネガティブに機能している。また、この時間帯の実習科目以外に公開する授業が無い場合、参観者を得ることが難しい（長時間である、課題作品のプレゼンテーションなどがなく、ただ制作だけの時間では参観者に資するところが極めて少ない、などの理由による）。しかしながら、時間割に4コマ連続の実習が存続する限り事態は大幅には好転しないものとも予想できる。

同じ形式の繰り返しでは、授業参観に依って得るところは急速に逋減・飽和していくと、前回の概況報告では指摘されたが、良かった点・気になった点の指摘が量的に激減したということはない。しかしながら、内容的にはほぼ昨年同様であり、特段の新規性は認められなかつといわざるを得ない。

なお、今回初めて設けた「授業改善事例」については、4名が無回答もしくは「特になし」の回答であったが、それ以外は授業参観が授業改善に資することが報告された。具体例には、「休み時間のうちに板書をしておく」、「講義において話している際、時々、学生に目線を送るよう心がける」、「話し方のリズムやテンポ、展開など単調にならないように気を付けている」、「授業の開始時に、15回の授業スケジュールのうちの現在位置とその後の方向性を必ず言うようにする」などである。これらの他にも、具体的にどうであったかという記述はないものの、板書のタイミング、授業でのメリハリのつけ方・間のとり方、学生へのアドバイスの仕方が参考になったとする意見があった。

表 2.2-3 公開授業と参観の概要(デザイン学部)

公開対象の授業科目			参観教員数						
科目名	授業形態	公開教員	計	分類法A				分類法B	
				教授	准教授	講師	助教/助手	学科内	学科外
【デザイン工学科教員による科目】									
エルゴノミクス	講義	森下	1				1	1	
建築計画論	講義	山田	0						
自然のデザイン	講義	伊藤	2		1	1		2	
プロダクトデザイン実習 IV	実習	奥野	0						
デザイン史 II	講義	小野	1		1			1	
基礎ドイツ語 II ※	演習	子野日	0						
描写 II (デザインドローイング)	演習	村木	0						
造形計画演習 II	演習	南川	0						
英会話 II ※	演習	ブルネリ	1				1	1	
基礎フランス語 II ※	演習	瀧本	1	1					1
情報デザイン論	講義	益岡	0						
環境原論演習	演習	熊澤	0						
情報デザイン実習 II	実習	尾崎	1			1		1	
基礎韓国語 II ※	演習	朴	3	2	1			2	1
CAD製図	演習	三原	0						
小計			10	3	3	2	2	8	2
【造形デザイン学科教員による科目】									
造形演習 (立体)	演習	大河内	1		1			1	
グラフィックデザイン実習 IV	実習	桑野	0						
造形構成論	講義	吉原	2	1	1			2	
セラミックデザイン実習 4	実習	金丸	1				1	1	
色彩計画論	講義	山下	1		1			1	
テキスタイルデザイン実習 II	実習	難波	0						
照明学	講義	児玉	0						
フレッシュマンセミナー II ※	講義	柴田	0						
描写 IV	演習	関崎	0						
ヨーロッパ文学 ※	講義	長谷川	2		2			2	
デザイン史 II	講義	北山	5	2	1		2	5	
グラフィックデザイン実習 IV	実習	中西(俊)	0						
グラフィックデザイン実習 II	実習	野宮	0						
CG演習 II	演習	八尾	0						
ITコンテンツデザイン演習	演習	斎藤	1			1		1	
パッケージデザイン I	演習	西田	2	1			1	2	
小計			15	4	6	1	4	15	0
総計			25	7	9	3	6	23	2

(注) ※印は全学教育科目

3. 授業評価アンケート

本学では、FD活動の一環として、平成15年度に授業評価アンケートを試行し、平成16年度より定期的（毎学期末）に授業評価アンケートを行っている。授業科目ごとの集計結果は各授業担当者にフィードバックし授業改善に活用してもらうとともに、これらのデータに基づいた評価尺度の妥当性・信頼性の検討、評価得点の経年変化の吟味など統計的分析も随時行っている（教育年報2004、2005、2006参照）。また、組織的（学科・コース・授業科目単位等）な教育改善の資料として用いられてもいる。ここでは、前年度の報告（教育年報2008）以降の平成20年度後期および平成21年度前期の授業評価アンケート結果の概要を述べる。

また、本年度は6年間継続してきた授業評価アンケートの実施方法を見直すことを目的として、本学全教員を対象に『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査を実施した。本節の後半では、その結果の概要とそれらの結果に基づいて検討された新しい実施法の概略について述べる。

(1) 授業評価アンケートの実施方法・活用方法

原則として全授業科目（非常勤講師担当科目を含む）を評価対象とするが、学外実習をともなう科目や履修者が10人未満の科目などは、本学統一様式によるアンケート対象からは除いた。アンケートは授業科目ごとに全受講生を対象として無記名・自記式（5段階評価、マークシート方式）で学期末に実施した。回収されたアンケートは評価委員会が集計し、後日、統計処理した資料を授業担当者に送付している。学部・学科・コース・授業科目によっては、これらの資料に基づいた授業改善策などの検討が行われている。

(2) アンケート集計結果の概要と課題

平成20年度後期の実施科目数は253科目（実施率98.1%、延べ実施教員数140人、延べ受講生数9,610人）、平成21年度前期の実施科目数は300科目（実施率99.0%、延べ実施教員数160人、延べ受講生数12,094人）であった。なお、実施教員数は授業担当代表教員でカウントしている。

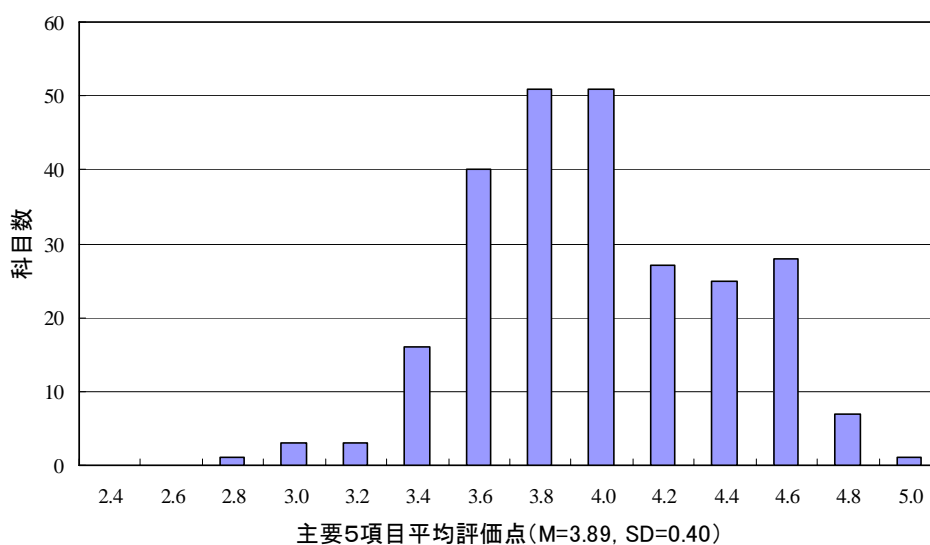
アンケート項目は全体で15項目であるが、このうち「全般的な授業への満足度」との連関が強いものが表2.3-1に示す5項目（以下、主要5項目とする：共分散構造分析による推定結果、教育年報2004参照）である。

平成20年度後期および平成21年度前期に実施した授業評価アンケートの結果（主要5項目の平均評価点の分布）を図2.3-1に示す。前回報告した平成19年度後期および平成20年度前期の主要5項目の全科目平均得点はそれぞれ3.83（SD=0.41）、3.86（SD=0.39）であったが、今回の得点は僅かながら上昇している。

表 2.3-1 授業評価アンケート主要 5 項目

問 1	受講して、知的刺激を受けましたか	*1
問 2	真剣に受講しましたか	*1：主に学生自身に関する認識
問 8	学生の理解度に注意していましたか	*1, *2
問 7	教員の熱意が感じられましたか	*2：主に教員に対する認識
問 10	授業の進め方は丁寧でしたか	*2

平成20年度後期授業評価(N=253科目)



平成21年度前期授業評価(N=300科目)

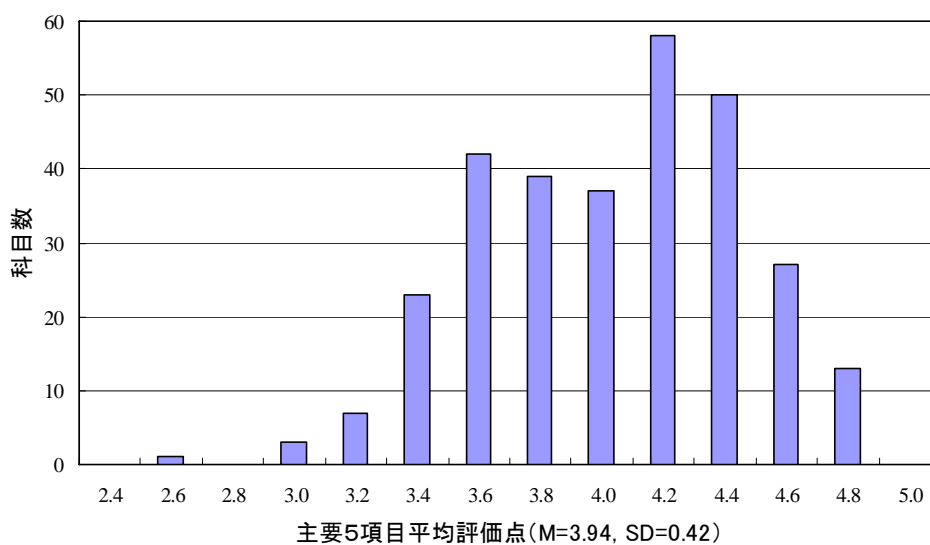


図 2.3-1 授業評価アンケート（主要 5 項目）平均評価点の分布

表 2.3-2 平成 20 年度後期・平成 21 年度前期の項目別平均評価点

項 目	平成 20 年度後期			平成 21 年度前期		
	全学	学部	全体	全学	学部	全体
1 受講して、知的刺激をうけましたか *	3.7	4.0	4.0	3.9	4.0	4.0
2 真剣に受講しましたか *	3.7	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0
3 シラバスにそった授業でしたか	3.7	3.9	3.8	3.8	3.9	3.9
4 教員の声、話し方は適切でしたか	3.9	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0
5 板書等の書き方や文字は見やすかったですか	3.7	3.8	3.7	3.8	3.8	3.8
6 重要なところを強調してくれましたか	3.9	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
7 教員の熱意が感じられましたか *	4.0	4.1	4.0	4.0	4.1	4.1
8 学生の理解度に注意していましたか *	3.6	3.7	3.7	3.7	3.8	3.8
9 予習・復習を促す配慮はされていましたか	3.6	3.7	3.7	3.6	3.7	3.7
10 授業の進め方は丁寧でしたか *	3.8	3.9	3.8	3.9	3.9	3.9
11 授業の準備は十分されていましたか	3.8	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
12 学生の質問にきちんと対応していましたか	3.8	4.0	4.0	3.9	4.0	4.0
13 私語等に対する配慮は適切でしたか	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8
14 教室等の状態や学生数は適切でしたか	3.7	3.9	3.9	3.9	4.0	4.0
15 総合的に判断して授業に満足しましたか	3.8	4.0	4.0	3.9	4.0	4.0

(注：項目の*は主要5項目を示す。また「全学」が全学教育科目群、「学部」は学部教育科目群を示す。)

授業評価アンケート全 15 項目の平均評価点の概要を示したものが表 2.3-2 である。全学教育科目と学部教育科目を分けて表示している（視覚化のために 4 以上の数値は太字で示している）。

主要 5 項目のうち「7 教員の熱意」は何れも上位の評価を得ているが、「8 学生の理解度への注意」は下位にあり、この様相は従前のアンケート結果と変わりはない。全学教育と学部教育では若干異なるが、その他の項目も従前の調査結果と同様の傾向にあった。

項目全体の評価点を比較して概要を述べるとすれば、十分に授業の準備は行われており（項目 11）、重要なところを強調する（項目 6）など、教員は熱意を持って授業を行っている（項目 7）と受け止められているが、学生の理解度への注意（項目 8）や予習・復習を促す配慮（項目 9）、板書等の書き方（項目 5）、私語に対する注意喚起（項目 13）などの点は、改善の余地がまだあるということになる。全国的に学生の学力低下が問題視されているなか、学生の学力や修学態度への考慮が求められていると考えられる。

ここでは個々の授業科目の評価資料は割愛するが、それぞれの授業評価アンケートの結

果は、各授業担当者にとっては受講生がどのように認識していたかを客観的に知り得る資料といえる。授業担当者はもちろんのこと、学部・学科・コース・授業単位で、また大学全体としても、授業評価の結果を真摯に受け止め、さらなる授業改善に努めることが望まれる。

(3) 「『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査」の集計結果の概要と課題

本学では6年間同一の基準・項目で授業評価アンケートを行ってきた。この目的は、評価尺度の妥当性・信頼性の検証および経年変化の吟味など統計学的分析に裏打ちされた授業評価法を確立することにあった(教育年報2004, 2005, 2006参照)。しかし、授業評価の目的は当然ながら授業改善にある。評価点は僅かではあるが上昇傾向がみられ、教員の授業改善の意識の高まりや具体的な授業改善活動なども増えつつあるように思われる。

一方、授業評価のマンネリ化(教員、学生)や評価・改善面の具体的な問題点(信頼性に欠けるとみられる回答が後を絶たない、実際の授業改善に結びつける困難さ、など)が浮き彫りになってきている。

そこで本年は、授業評価アンケートの実施方法を見直すことを目的として、本学全教員を対象に「『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査」を実施することとした。調査項目は、全授業を授業評価の対象とするか、どのような方法で実施するか、評価項目はどうあるべきかなど、9項目とした。実施時期は平成21年10月7日から14日とし、全教員にアンケート様子を配布した。56人から回答があり、赴任直後の教員や授業主担当者でない助教・助手を除いた場合の回収率は40.3%であった。

集計結果の詳細は、付録I「『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査」の詳細に掲げるが、結果を大まかに集約すれば、「授業評価は基本的にすべての授業科目で実施すべきである(毎学期)。アンケート項目や回答方法については見直しが必要である。また、学生へのフィードバックや授業内容との関連なども検討すべきである。」という方向がみえてくる。

これらの結果を受けFD活動部会で検討した授業評価の実施方法の見直し策として、以下の事項を評価委員会に諮り、平成22年度から実施することとなった。

第7回岡山県立大学評価委員会議事要旨(抜粋)

(1) 協議事項

② 授業評価アンケートの見直しについて

ア 授業評価の対象は、原則として全ての授業とする。

実施対象は最終的には学部(学科)及び全学教育研究機構で決定する。

イ 実施は、従来通り年2回(前後期)とするが、四半期、集中及び学外実習等の授業は適宜実施する。

ウ アンケート項目を次のとおり「共通(仮称)項目」及び「任意(仮称)項目」に区分する。

共通項目：これまでの主要5項目及び「15.授業満足度」の6項目とする。

任意項目：学部(学科)及び全学教育研究機構は、授業改善に資すると考えられる項目を

独自に設定することができる（9項目以内）。また、実習・演習等の授業形態に応じた個別のアンケート項目（自由記述等）を設定することができる。

エ マークシートの準備及び集計作業等は、FD活動部会が担当する。

オ なお、学部（学科）及び全学教育研究機構で決定した実施授業科目およびアンケート任意項目は、事前にFD活動部会に報告する。

カ 平成22年度から実施する。

4. FD講演会

平成21年度は初めての取り組みとして教職員を対象に、本学のFD活動の目的とその実際について、教職員の理解を深めるために研修会を計画した。本年度は大学機関別認証評価を受ける年度でもあることから、平成21年8月に全教職員を対象に、全学評価委員会副委員長の野津滋教授から「大学認証評価とFD活動」について、さらに、FD活動部会委員長の香川幸次郎教授から「本学のFD活動のあゆみと現状」について講演を行った。また、授業改善への取り組みについて、FD活動部会副委員長の迫明仁教授からは「授業評価の意義と評価内容」について講演し、本学のFD活動の理解や協力の促進に努めた。また11月には、平成20年度に引き続き、外部の講師を招聘し、先進的な取り組みをしている大学のFD活動を学習した。これまでの相互授業参観を生かし、さらに授業改善を図っていく一助になる授業の進め方について、昨年に引き続いて、愛媛大学の小林直人先生にお願いした。テーマは「効果的で魅力ある講義の進め方」とし、ワークショップ形式でのミニ講義を取り入れたより実践的な研修会を実施し、個々の教員の授業改善の取り組みの充実を図った。

本年度の講演の中でも小林先生は、「良い授業」とは“わかりやすく”“知的な緊張感があり”“学生が参加する（あるいは参加した気にさせる）”授業であると伝えてくださった。こうした授業を展開するためには、まず教員が“様々な授業スキルを実際の体験を通じて習得し、習得したことを自分の授業に生かす”ことが大切であり、主体的にFD活動にかかわることが重要である。

(1) 第1回全学FD研修会

平成21年度全学FD活動の一環として、本学FD活動の取り組みについての研修会及び意見交換会を開催し、全教員の内106名が参加した。本年度は、独立行政法人大学評価・学位授与機構による「大学機関別認証評価に関わる訪問調査」が10月に予定されていることもあり、あらためて野津評価委員会副委員長より、認証評価に関わるFD活動への協力と理解について、趣旨の説明と教員への協力を要請した。

・日時：平成21年8月4日（火）10時30分～12時00分

・内容：岡山県立大学FD活動の取り組みについて（講演終了後、意見交換）

1. 「大学機関別認証評価とFD」...野津 滋教授（評価委員会副委員長）
2. 「本学のFD活動」...香川幸次郎教授（評価委員会FD活動部会委員長）
3. 「授業評価の意義と評価内容」...迫明仁教授（FD活動部会副委員長）

・場所：大学講堂

第1回全学FD研修会の内容は以下のとおりである。



1. 「大学機関別認証評価とFD」 野津 滋評価委員会副委員長

評価単位は「大学」であって、「学部」「学科」単位ではない。

【1】認証評価の概要（学校教育法109条2項）

- 1) 教育研究水準の向上に資する
 - ・教育研究，組織運営および施設設備の総合的な状況
 - ・7年以内ごとに
 - ・文部科学大臣が認証する評価機関による評価を受けること
- 2) 各大学は複数の認証評価機関の中から評価を受ける機関を選択
- 3) 認証評価機関：大学評価・学位授与機構

【2】評価に際しての5つの基本方針（大学評価・学位授与機構 説明会）

- 1) 大学評価基準に基づく評価
- 2) 教育活動を中心とした評価
- 3) 各大学の個性の伸長に資する評価
- 4) 自己評価に基づく評価
- 5) ピア・レビューを中心とした評価

【3】基準1～基準11

- ・基準1 大学の目的
- ・基準2 教育研究組織（実施体制）

- ・基準3 教員および教育支援者
- ・基準4 学生の受入
- ・基準5 教育内容および方法
- ・基準6 教育の成果
- ・基準7 学生支援等
- ・基準8 施設・設備
- ・基準9 教育の質の向上および改善のためのシステム (FD)
- ・基準10 財務
- ・基準11 管理運営

【4】基準9 教育の質の向上および改善のためのシステム (FD)

・基準9-1

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて改善・向上を図るための体制が整備され、組織的な取り組みが行われており、機能していること。個々の教員は、評価結果に基づいて、それぞれの質の向上を図るとともに、授業内容、教材、教授技術等の継続的改善を行っているか。

・基準9-2

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われていること。

・基準9-1及び基準9-2における観点

[観点9-1-①]教育の状況について、活動の実態を示すデータや資料を適切に収集し、蓄積しているか。

[観点9-1-②]大学の構成員（教職員及び学生）の意見の聴取が行われており、教育の質の向上、改善に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

[観点9-1-③]学外関係者の意見が、教育の質の向上、改善に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

[観点9-1-④]個々の教員は、評価結果に基づいて、それぞれの質の向上を図るとともに、授業内容、教材、教授技術等の継続的改善を行っているか。

[観点9-2-①]FDが、適切な方法で実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。

[観点9-2-②]教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。

[観点9-2-③]FDが、適切な方法で実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。

[観点9-2-④]教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るため

の研修等，その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。

野津滋評価委員会副委員長は、「教育の質の向上・改善」のためには，以下の5つの項目を同時に達成してゆくことが必要であると，まとめた。

9-1-① データ・資料の収集・蓄積

9-1-②，③ 学生・教職員・学外者意見

9-1-④ 各教員による評価結果の活用と質の向上及び授業改善

9-2-① FD活動の組織的な取り組みと教育の向上・改善への結びつき

9-2-② 教育支援者・補助者の資質向上

2. 「本学のFD活動のあゆみと現状」 香川幸次郎FD活動部会委員長

【1】 本学のFD活動のあゆみの概要

・平成15年度より平成21年度まで，段階的な取り組みを行ってきた。

①教員による授業評価法・・・「講演・講習会」

②モデル授業の参観・・・「教員参加型」

③相互授業参観・・・「双方向参加型」

【2】 本学のFD活動のあゆみ

・平成15年度

情報システム工学科における授業評価（佐藤洋一郎 助教授）

ポートフォリオを活用した授業の実践例（辻明仁 教授）

・平成16年度

大学における国際化戦略とFD（韓国ウソン大学 金 教授）

・平成17年度

平成16年度授業評価アンケート報告

アンケート結果のまとめ（山根國義 教授）

アンケートの方法の適正化に関する解析結果（中嶋和夫 教授）

各学部の代表教員による授業方法に関する講演

保健福祉学部（授業方法の工夫）

情報工学部（板書と筆写 伝統的スタイルへのこだわり）

デザイン学部（視覚伝達論 授業の展開と工夫）

短期大学部（私の授業方法の紹介）

・平成18年度

授業参観（モデル授業）の実施

各学部および短期大学部より、授業評価が最も高かった教員を学部ごとに選出し、所属学部の全教員で参観。

平成18年11～12月に実施

参観教員によるレポートの提出

→授業方法の改善や教授能力の向上を図る。

→自らの授業を見直す機会と示唆を得る。

・平成19年度

相互授業参観（ピュアレビュー）の実施

すべての専任教員は、公開する授業を1科目選択し、かつ公開された授業を参観する。

平成19年11月～12月に実施

レポートの提出（当該授業を選択した理由、参観してよかった点、気になった点、参観教員科目に生かせる点）

→受身型授業参観から教員の個別性を重視した授業能力の向上を目指す。

・平成20年度

相互授業参観（ピュアレビュー）の実施

FD講演会

愛媛大学FD活動の取り組み（小林直人氏）

効果的な授業の進め方（小林直人氏）

シンポジウム等の参加

日本のFDの未来（京都大学）

授業評価からFD評価へ（京都大学）

→FD活動の新たな方向性を模索する。

3. 「授業評価の意義と評価内容」 迫 明仁 FD 活動部会副委員長

【1】 授業評価の意義と評価内容

授業評価の意義 1（一般的な観点：名古屋大学HP，他より）

- ・個々の授業内容と教師のスキルを改善するため
- ・大学としてのカリキュラム全体の改善のため
- ・個々の教員の教授能力を評価するため
- ・学生が授業や教師を選択する際の資料とするため
- ・学生が自分の受けている教育について自覚的になることを促すため
- ・「教育：研究」に対する教員の意識 日本では3：7 欧米では4：6（カーネギー教育推進財団調べ）

【2】 授業評価の意義 2（大学機関別認証評価基準より）

・基準6 教育の成果

観点6-1-③ 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか

・基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

観点9-1-④ 個々の教員は，評価結果に基づいて，それぞれの質の向上を図るとともに，授業内容，教材，教育技術等の継続的改善を行っているか。

【3】 評価内容 1（本学の「学生による授業評価アンケート」）

- ・平成15年度：「学生による授業評価アンケート」を試行
- ・平成16年度：「授業評価尺度（15項目版，5項目版）」の作成・全面实施
- ・平成17年度：「授業評価尺度」の信頼性・妥当性の検証，一部項目の修正
- ・平成18年度：「5項目版授業評価尺度」による経年変動（3年分）の解析
- ・平成21年度：実施方法と評価内容の再検討

【4】 評価内容 2（本学の「学生による授業評価アンケート」）

「授業評価アンケート」の対象

原則として，下記を除く全科目。ただし，対象の決定は学科長・教務専門委員の判断に従う。

- ・履修登録者数10名以下の授業科目
- ・学外実習をとまなう授業科目
- ・オムニバス形式の講義科目
- ・スポーツⅠおよびスポーツⅡ
- ・集中の授業科目
- ・1単位の講義科目

【5】 評価内容 3（本学の「学生による授業評価アンケート」）

「授業評価アンケート」の主要5項目は「総合的に判断して授業に満足しましたか」と関連が強い項目で構成している。

学生の受講姿勢に関する項目

- ・受講して，知的刺激を受けましたか。
- ・真剣に受講しましたか。

教員の教育姿勢に関する項目

- ・教員の熱意が感じられましたか。
- ・学生の理解度に注意していましたか。

- ・授業の進め方は丁寧でしたか。

【6】評価の課題（「学生による授業評価」モデルの再検討）

どのような「授業評価アンケート」を行い、どのように「教育の効果や成果」に結びつけるか？

研修会終了後、FD活動部会と会場参加者との意見交換会が行われたが、質問の内容は、授業評価及びアンケート内容に関するものが中心であった。意見交換会及び配布アンケートによる参加者の意見は以下のとおりであった。

- 1) 日本と欧米の「教育：研究」に関する教員の意識（カーネギー教育推進財団調べ）の差を単純に比較することはできないのではないかと？欧米では、教育活動が研究活動として含まれて評価されている点が日本と違うのではないかと？<デザイン学部>
- 2) 質問内容を新たに検討するに際して、評価アンケートの評価内容を厳密に分析する必要があるのではないかと？特に、抽出5項目版についても、質問項目によっては矛盾している内容もあるので、項目内容の検討が必要ではないかと？<デザイン学部>
- 3) 授業評価の意義と評価内容に関して、「一般的な観点」だけでなく、「本学的な観点」について、FD活動部会の考え方を示して欲しい。<デザイン学部>
- 4) 「授業評価アンケート」については、項目毎に矛盾点があるので、FD部会での、現在の検討内容と今後の方向性について、示して欲しい。<デザイン学部>
- 5) 学生の受講姿勢に関する項目において「受講して、講義内容が理解できたか」があっても良いと思いますが、いかがでしょうか？<情報工学部>
- 6) なぜ、授業評価アンケートは、10名以下の履修登録者数の科目を除外するのか、理解できません。履修登録者数の少なすぎるのは、ある意味問題なのではないでしょうか？履修登録者別評価を行われてはどうでしょうか？現状アンケートでは、履修登録者数の多い科目と少ない科目が同じ評価基準になっています。<情報工学部>
- 7) 時に「この学生はまじめに記入しているのか」と思わせるマークシートが散見されます。どの科目においてもあることかもしれませんが、受講生が多く、教員との個人関係も薄い全学教育系の科目において、あるいはそういう傾向が強いのかもかもしれません。そこですが、履修案内にページをさいて、授業評価アンケートの意味、その記入の心得などを学生に示してはどうかと考えます。ご検討いただければ幸いです。<デザイン学部>
- 8) 「FD研修会」の内容について：FD活動をめぐっては、さまざまな考え方や取り組みが国内外で行われていますが、本学の取り組みについてみると、授業評価に偏っていると感じます。しかしながら、これでは捉え方が狭いと考えます。FD論の根底にあるのは、大学教員の専門性論も含まれると考えます。それ故、「FDとは何か？」について、大学設置

基準などの前提にすぎることではなく、本学として、しっかり定義することを要望します。この点が曖昧であっては、テクニカルな発想や取り組みに始終し、真に本学の教育・研究の質の向上と学生のためのより良い学習環境の整備につながらないと考えます。〈情報工学部〉

(2) 第2回全学FD研修会

テーマ「効果的な魅力ある講義の進め方」

講師：小林直人先生（愛媛大学医学部総合医学研究センター長）

日時：平成21年11月17日（火） 15時00分～17時00分

出席者：全学教員対象とし、参加者47名（保健福祉学部18名、情報工学部16名、デザイン学部12名、学長）が参加した。



第2回FD研修会参加状況

		教授	准教授	講師	助教	助手	学科別	学部別
保健福祉学部	看護学科	3	1	0	0	2	6	18
	栄養学科	2	2	0	1	0	5	
	保健福祉学科	5	1	0	1	0	7	
情報工学部	情報通信工学科	3	2	0	2	0	7	16
	情報システム工学科	3	3	0	0	0	6	
	スポーツシステム工学科	2	1	0	0	0	3	
デザイン学部	デザイン工学科	1	3	0	2	0	6	12
	造形デザイン学科	1	1	3	1	0	6	
職位区分別合計		20	14	3	7	2	46	

愛媛大学は教育・学生支援機構教育企画室を中心とする FD ならびに SD (Staff Development) 活動で知られており、読売新聞による「大学の實力『教育力向上への取り組み』調査 西日本編」において「FD に関する取り組みでモデルにしている、または参考にしている大学」の第 1 位に取り上げられている。講師の小林直人先生



は、愛媛大学大学院医学系研究科医学教育学分野の教授で、愛媛大学医学部総合医学研究センター長で、愛媛大学教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長を兼務されている。

小林直人先生は単に話を聞くだけでなく、自らが主体的に FD 活動にかかわる重要性を強く指摘し、本年度はワークショップ形式でのミニ講義で、マイクロ・ティーチング技法による少人数グループによるミニ講義とグループワーク方式での参加型の研修会の提案があった。

本研修会では、5-6 名によるグループ構成とグループ毎に 2 名の参加者がミニ講義を行う形式が用いられた。このため参加者全員に 10 分程度のミニ講義の準備を事前にお願ひし、研修会当日にグループ内でミニ講義の担当者をグループ毎に決める方法で進めた。

1) 研修会の目的・目標

「学生中心の大学」を実現するための“良い”授業ができるようになる。良い授業とは「わかりやすい授業」「知的緊張がある授業」「学生が参加する（した気にさせる）授業」である。

「授業は大学の最も重要な“商品“， ”話し方“は最も重要な授業スキル」

2) ミニ講義の目的



講義担当者の講義スキルの練習であり、実際には講義の聞き役の先生が「良い点」「改善点」を見つけることに主眼を置くこと、ミニ講義はうまい講義である必要はないこと、学生を想定して語ること、話の内容よりも、話し方そのもの、専門用語の説明の仕方、資料の提示の仕方などを確認し、講義のスキルアップをすることをねらいとすることなどを参

加者全員に伝え、ミニ講義の準備の参考になるように示した。

3) ワークショップ《8 グループに分かれて実施》

- ①ミニ講義（各グループ毎に2名が担当）
- ②コメント発表（グループ毎に討議：聞き手役の教員から良い点、改善点の報告）
- ③ミニ講義のまとめ（グループ毎に発表）
- ④全体まとめと質疑応答

小林先生は講義スキルとして、「講義はこうすれば良いといった画一的なものはないが、実際の授業スキルとして、授業を円滑に進める「板書」「プリント」「コミュニケーション」の3つの効果的なテクニックを取り上げ、質問への参加に対する抵抗感を軽減する方法、マイクと肉声による



る声質の違いを考慮した発声・発話方法として、母音を“大きく”子音を“長く”発声するコミュニケーション技法等が紹介された。また、わかりやすい話し方として、①ゆっくり話す、大きな声で話す、②否定語、文末を強調する、③アイ・コンタクトして話す、聞き手に近寄って行って話す、④キーワードを強調して話す、特に抑揚をつけて、前後に間を入れて、何度も繰り返して話す、⑤紛らわしい言い方は避ける、⑥板書やプリントを併用するなどのポイントがあげられた。

4) ミニ講義体験後にグループから提示された《良かった点》、《もう少し良くなる点》

グループ毎にミニ講義を受講して、良かった点ともう少し良くなる点についてグループメンバーで話し合い、その後に提出された資料を整理し、以下に示した。どのグループも前向きに討議が進められ、自らの講義の改良点や参考となる点など、気づきが提示された。



■A グループ

《良かった点》

話す速度が適切／例を挙げての説明／身近なエピソード／イラストの活用／テキストにメリハリ／助けになるテキスト／説明と資料のリンク／言葉に顔がある／今から何を話すか明確／興味を持たせながら引き込む／内容が興味深かった／その気になる／対象を見ていた／資料を出すタイミング／写真によって興味を引く／姿勢と手振り／展開の仕方／新しい見方を得た／声がポイントのタームで強調されていた／最初にテーマを明示し、書かれていたので分かりやすい／3次元をイメージするのに道具を使っていた／3次元にあわせて先生自身が動いていたので集中しやすかった／対象が体なので特に体を動かしたのがよかった／教科書や文献を読む時のポイント（間違いやすい箇所）を示していた／人体の絵を描かれたのがよかった／専門用語の正しい発音が印象的だった

《もう少し良くなる点》

スライドをそのまま読む／声が小さい／流れがよすぎる／周りの様子を見る／切れ目に間をあける／最初をスムーズに／言葉の意味を丁寧に／学生とのやり取りがあっても良い／呼びかけ／相手に考えさせる／話の筋のよじれの改善／学生によっては「特異的？」の用語を正しく把握できるか

■B グループ

《良かった点》

板書が分かりやすい／目配りがあり、聞きやすい／重要な点を確認しながら進めるので分かりやすい／ストーリーにのって話されており理解しやすい／写真や図を示すことで聞き手に理解されやすい工夫がされていた／イメージを上手く伝えていた／大変分かりやすい説明であった／話の流れが分かりやすい／学問領域の流れが良い／言葉（キーワード）の解説が分かりやすい

■C グループ

《良かった点》

同じテーブルで同じ目線で話をしているので、グループ活動は特に良かった／熱意が伝わった／前回の実習の話から入っているので、学生がついていきやすい／自己紹介が良い／目標が分かりやすかった／分かりやすい表現で良かった／知らない人が聞いてもよくわかる／精神科での学生への戸惑い／具体的事例を写している／引き込まれる／表情が豊か／テンポが良い／身振り手振り／ホワイトボードに要点を書いている／資料を必要に応じて提示／学生が実習とのつながりをイメージできる／「かわいらしいこと」といわれて「何かな」と興味を引かれる／楽しさを実感させて保育園の子にも体験させる、実感させる／エンターテイナーとなっている／楽しめる／発展性／しゃべり方がはっきりしている、明瞭／（歌を知らなければ）状況に合わせて対応させている／学生の名前を覚える

《もう少し良くなる点》

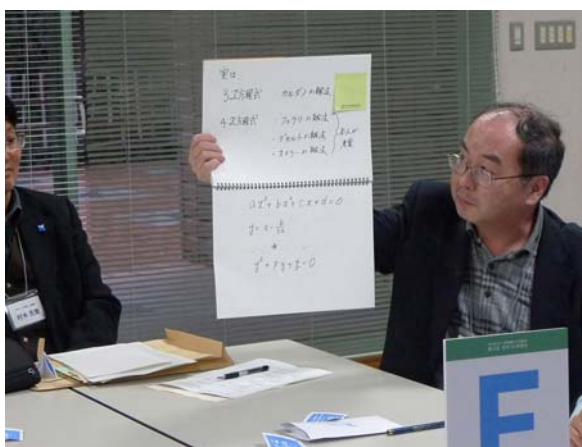
ゆっくり／学生にも自己紹介／資料に通し番号／アイ・コンタクト／人数が多い時は学生の状況を一人ずつ確認しながらしたい／ゆっくりとされたら良かった

■Eグループ

《良かった点》

話し方が丁寧／視線，アイ・コンタクトをよくしている／口元の表情がよい／実物が最初に来たのがよい（つかみ）／トランジスタの語源の説明がよかった／板書の手際よさにライブ感があってよかった／トランジスタの電圧の説明で，電球の話から入ったのがよかった／難しい話を硬軟取混ぜて，とっかかりやすく話してくれた／板書の時の姿勢／手もよく動かし板書もスピーディーで引き込まれやすい／内容に引き込まれた／具体物をデータで示している点／資料の提示を学生の所まで持ってきて示してくれ，身近に感じる／話し方がやさしい／教材の提示の順番がよく，引き込まれた／「アート」「価格」というキーワードの提示がよかった／本日の人数であれば，声の大きさ，スピードは問題ない／今後の展開や落ちなどの持っていき方はもう少し工夫できる

■Fグループ



《良かった点》

テーマがよい／甘口／入り口を示してくれる／エピソードを入れている／全体的などの部分の講義というものを示してくれた／学問の限界を示している点／テンポが良い／ここぞという時に隠しておいて出す点（タイミング）／身近に感じさせる距離感／問いかけをしながら／簡単なモノから複雑なモノへとの話の流れ

■Gグループ

《良かった点》

（自分と比べて）ゆっくり話している／聞き取りやすい／先週の復習＝「覚えておかない」と思う／本日のテーマを明示／書かせることを示しておくのがよい（「当てられるのでは」という緊張感が生じる，重要であることがわかる）／アイ・コンタクト／例える（「現象」＝「発掘」などと説明）／パワーポイントのスライドが綺麗（さすがデザイン）／大きな声でスピードもスライドにあっている／明確に区別して提示しているので，頭の中で整理しやすい／話した後にスライドを配布＝メモをとらない／演習形式とのバランスを考えている（演習に入る前のスライドなので）「今日の話が分かった人」と聞く／メモを取れるスピードで話している／穴埋めのプリントを配布して，授業中に埋めていくような形になっている／内容に引き込まれた／具体物をデータで示している点／資料の提示を学生の

所まで持ってきて示してくれ、身近に感じる／話し方がやさしい／教材の提示の順番がよく、引き込まれた

《もう少し良くなる点》

板書→ノートを意識していない（主題が真中で内容が周辺，文字が斜めになる）／多くが書かれていることなので，脱線するのによいのでは／パワーポイントは使いたくない（見ただけになる，ただ，実物写真を見せるには良い）

⑤ 2回全学FD研修会のアンケートの結果

アンケートの実施の時期が遅くなったが，24名の方から回答が得られた（回収率は58%）．回答を5件法で求めた結果，満足・とても満足を合わせた回答割合は，Q1.「FD研修のテーマについて」が91.7%，Q2.「ワークショップの内容について」が91.7%，Q4.「講師の説明について」91.7%といずれも満足と回答した割合は90%を超えていた．しかし，Q3.「ワークショップの時間について」は満足・とても満感が66.7%であり，33.3%の方がどちらでもない，不満と回答していた．学部間による回答には違いは認められなかった．

次にFD研修会全体に対する自由記述による意見を整理し示した．

A. グループワーク形式の研修について

- ①グループ形式でのFD研修は初めてだったので新鮮だった．
- ②グループ分けの人数は適切だった．
- ③グループ別にミニ講義をしたが全体で行い，講師の先生にまとめてもらう方法もよい．
- ④ミニ講義の時間を少し長くさせてほしい．
- ⑤ワークショップ形式ですることによって講義の良い点，工夫点を見つけることが出来て，多くの視点からとらえることができた．
- ⑥全体的に楽しい研修会であった．
- ⑦普段あまり交流のない他学部の先生の講義が聴けて楽しかった．
- ⑧学内教員の多様性に感心した．
- ⑨一番印象が深かったのはミニ講義でした．
- ⑩テーマ，講演内容ともに興味深かった．

B. ミニ講義への参加から受けた刺激

- ①他学科，学部の先生の講義の仕方がわかり，自分の授業の参考になり良かった．
- ②いろいろな先生の講義を拝聴する機会をえて，即自分の実践に生かすことができる．
- ③体験的に学べる場となり，とても良かった．

C. 研修環境

- ①今少しミーティングが落ち着いてできる環境が良い．
- ②周囲の音が気にならない環境がほしい．

D. 今後の研修について

- ①可能ならば、全員参加の方向で検討してほしい。
- ②一人当たりのミニ講義の時間が短い。
- ③不参加の先生に今後どのように参加を頂くのか、検討が必要。特に若手の教員に参加の機会を作ることが必要。
- ④助手、助教、講師は希望者ではなく、全員参加としてはどうか。
- ⑤開催日時を決定を考慮してほしい。
- ⑥毎回は大変だがたまにはグループワーク形式で行ってほしい。
- ⑦同じテーマで何回か続けてほしい。

E. 講師について

- ①講師の説明が明確でよかった。
- ②同様の内容で他の先生からの講義もお聞きしてみたい。

F. その他

- ①意図は理解できたが、あの時間内で会得することは難しい。
- ②FD委員の先生も参加者として入ってほしい。
- ③事前の広報を十分にしてほしい。
- ④一人当たりの時間が少ない。
- ⑤アンケートのタイミングが遅い。

以上、さまざまなご意見があった。しかし概ね意義ある研修であったとの評価が得られた。今後、FD研修をより良くしていくための参考となる多くのご意見が頂けた。

(3) FDの学外研修

FD部会委員の学外研修は次の通りである。

1) シンポジウム 「学士課程における科学教育の未来」

日時：平成21年9月25日（金）

場所：京都大学百周年時計台記念館・百周年記念ホール（京都市左京区吉田本町）

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

参加者：森下 眞行

■プログラム

□開会挨拶 14:00～14:10 京都大学総長 松本 紘

第1部 カール・E・ワイマン 講演 14:10～15:30

「21世紀の科学教育—科学のツールを用いて科学を教える—」

科学が、過去500年の間にめざましい進歩を遂げたのに対し、科学教育は、中世以来のやり方からあまり変わっていない。だが、近年の学習に関する研究は、学生の思考と学習

に関する誤解を明らかにするとともに、改善についてのヒントも提供してくれている。学習に関する研究と IT を結びつけることで、21 世紀に向けて必要な科学教育をすべての学生に提供するための舞台が整えられつつある。この講演では、これまでの科学教育の失敗と新しいアプローチによる成功について、認知科学の知見をふまえつつ議論された。

〈司会〉 ・大塚 雄作：京都大学高等教育研究開発推進センター教授

第2部 パネルディスカッション 15:45～18:15

〈パネリスト〉

・カール・E・ワイマン

・坂東 昌子：「文系学生への授業経験」

元日本物理学会会長，NPO 知的人材ネットワークあいんしゅたいん理事長，愛知大学名誉教授

・笹尾 登：「大学における実験教育—物理教育の経験からみた課題—」

岡山大学教育研究プログラム戦略本部極限量子研究コア教授，京都大学大学院理学研究科教授（併任）

〈指定討論〉

・松下 佳代：京都大学高等教育研究開発推進センター教授

〈司会〉

・田中 耕一郎：京都大学物質-細胞統合システム拠点教授

□閉会挨拶 18:15～18:20

・京都大学高等教育研究開発推進センター長 田中 每実

□情報交換会 18:30～20:00

・百周年時計台記念館・国際交流ホール

主催：京都大学高等教育研究開発推進センター

共催：京都大学理学部，京都大学グローバル COE 「心が活きる教育のための国際的拠点」

協賛：京都大学 FD 研究検討委員会

2) 創価大学FDフォーラム

戦略的大学連携GP・現代GPフォーラム

日時：平成21年12月12日（土）～平成21年12月13日（日）

場所：創価大学大教室棟 S201（東京都八王子市丹木町1-236）

主催：主催：創価大学

後援：大学コンソーシアム八王子・文部科学省・戦略的大学連携支援事業「八王子未来学」

参加者：森下 眞行

●12月12日（土）13：00-17：00 【創価大学FDフォーラム】

開会挨拶：馬場 善久 創価大学副学長（全学FD委員会委員長）

基調講演：「学士課程教育の新段階と私大教員の使命」寺崎昌男 立教学院本部調査役

パネルトーク：「創価大学の組織的FD活動10年のあゆみ」

パネラー：馬場善久副学長，坂本辰朗教育学部長，関田一彦教育学習活動支援センター長

コメンテーター：池田輝政名城大学副学長

●12月13日（日） 【戦略的大学連携GP・現代GPフォーラム】

開会挨拶：「創価大学のGPへの取り組みについて」馬場善久創価大学副学長

【第1部：八王子未来学の取組より】

取組紹介：「八王子の大学連携について」水谷惟恭東京工業高等専門学校長

基調講演：「大学間連携の推進について」今泉柔剛文部科学省高等教育局大学改革推進室

【第2部：現代GPの取組より】

挨拶：「現代GPの取組について」勅使河原可海創価大学工学部教授

実績報告：「Collab Testの活用と今後の展開」高木正則創価大学工学部助教

基調講演：「持続可能なe-learning活用の組織的知識マネジメントとFD」

岡本敏雄教育システム情報学会会長

パネルトーク：「ICTを活用した教育の展望」

パネラー：小松川浩千歳科学技術大学教授，中嶋航一帝塚山大学教授，大西淑雅九州工業大学講師，穂屋下茂佐賀大学教授，石橋博道創価大学情報システム部課長，

コーディネーター：望月雅光創価大学教務部副部長

閉会の挨拶：関田 一彦 創価大学教育・学習活動支援センター長

3) 2009年度 第15回FDフォーラム

日時：2010年3月6日～7日

場所：同志社大学今出川校地

主催：財団法人大学コンソーシアム京都

参加者：金川明弘

FDフォーラムは、財団法人大学コンソーシアム京都が主催する関西を中心としながらも全国展開するFDシンポジウムであり、今年は15年目の節目の年にあたる。本年度のフォーラムのサブタイトルは「学生の学びを支える-つなぐFDの展開」であり、この「つなぐ」という言葉がキーワードになっている。

会場は1日目が同志社大学今出川校地の室町キャンパス寒梅館，2日目が同じく新町キ

キャンパス尋真館・臨光館で行われた。本フォーラム企画検討委員会委員長、金谷益道同大准教授の京都 FD 開発センターの活動報告がなされた。特に昨年同センターにより発行された『まんが FD ハンドブック おしえて！FD マン』の売れ行きが好調で、本年増刷し再発行するそうである。同センターの詳しい活動内容は、「京えふで」で検索を行うと容易にウェブサイトにいけるので、そこを参照されたい。さて京都大学高等教育研究開発推進センターの大塚雄作教授のコーディネートの下、四つの「つなぐ」が4名のシンポジストにより示された。第一のシンポジストは岡山大学教育開発センター教授の橋本 勝氏による「学生をつなぐ FD」であり、内容は「組織でつなぐ」、「授業でつなぐ」、「心でつなぐ」という3部構成になっている。第一の「組織でつなぐ」であるが、氏の発表によると、岡山大学における FD 活動は教職員のみならず学生も組織的に参加するという実に驚くべきものであった。その名は学生・教職員教育改善委員会である。委員会の構成は11学部から推薦された学生委員約30名。学生委員は1年次生の5月に各学部より推薦を受けて任期は2年。それと各学部から推薦された教員委員+教育開発センター教員委員が15名程度。加えて学務部から推薦された職員委員+特色 GP 等による臨時職員の計約50名。この50名を統括するのは学生委員長（原則として2年次生）なのである。現在の活動は月平均1回の全体会、週平均一回のWGであり、授業改善/システム改善/学生交流などに取り組んでいる。過去の成果例としては

- 1) 学生発案授業
- 2) 学生側に立ったシラバスの改善
- 3) 授業評価アンケートのありかたを再検討し、答える側からの提案・試行.
- 4) 学生が全て任される履修相談室
- 5) 高校生の疑問に答える出張キャンパスライフ相談会
- 6) 副学長も参加するフリーディスカッション
- 7) 毎年、中身の変わる教育改善学生交流
- 8) 学内外の FD フォーラム等に参加・参画

などが挙げられていた。8) であるが、今現在この会場に岡大の学生委員が何名か参加しており、学生の FD 活動の参加意識の向上に役立っているとのことであった。

第二のシンポジストは、名城大学大学教育開発センター神保啓子氏である。氏のテーマは「職員をつなぐ FD」である。名城大学における FD 体制は教育担当理事・副学長の下に FD 委員会があり、それを FD 担当職員である大学教育開発センター5名がサポートする。さらにその下に FD 企画委員会があり、教育年報、自主開発、ワークショップ、学生満足度、大学院の各チームと教育優秀職員選考委員会により組織されている。ここでも教員22名に加えて8名の職員が参加しており、名城大学 FD にいかに関与しているかが分かる。主な活動は「授業参観/同僚に学ぶ」、「T&L(Teaching & Learning) CAFÉ」、「授業見学会の実施・紹介」、「FD フォーラムのワークショップ参加」である。T&L CAFÉ と

は授業の工夫を共有する目的で行われる軽食や飲み物を交えての教員の談話会である。最後は教育年報での報告が紹介され、このあたり本学と似ている所である。

第三のシンポジストは、同志社大学教育支援機構の圓月勝博氏による「教員をつなぐFD」である。氏の講演は、教員組織全体をいかにFD活動に向かわせられるかであり、自他共に認める難題である。FDに冷淡で非協力的な教員の存在はどこの大学でも存在する。氏の最近の発見で、2・6・2の法則がある。これはある大学組織の中で、FD活動に賛成で積極的な教員が2割、反対ではないがあまり積極的でないという層が6割、反対で非協力的な層が2割くらいの比率になるという法則である。本学もそうであろうか。実に興味深い法則であった。最後に氏は、新任教員研修の重要性を指摘した。大学教員だけが授業自体の訓練を受けていない教員なのである。しかも時間がたつと他者の言を受け入れにくい性格をもっている。「鉄は熱いうちに打て」という言葉で氏は発表を締めくくった。

第四のシンポジストは、山形大学高等教育研究企画センター小田隆治氏である。氏のテーマは「大学をつなぐFD」である。これについては「樹氷」や「つばさ」といった大学間ネットワークであり昨年の教育年報の内容とさして変わらないので、報告は省略する。二日目は会場を新町キャンパス尋真館・臨光館に移して、三つのミニシンポジウムと九の分科会にわかれ並行して行われた。その全てを報告することはできないが、レジュメ・資料集にコンパクトにまとめられており、希望される方はいつでも閲覧されたい。

5. 卒業時アンケート

本学では、平成15年度から、卒業時に「卒業時アンケート」を実施し、集計結果は毎年の「教育年報」に報告している。平成18年度には、過去3年間の集計資料に基づいた「卒業時アンケートの信頼性と妥当性」の検証を行い、アンケート項目の再構成を行った（検証の詳細は「教育年報2006」を参照されたい）。以下、平成20年度卒業時アンケートの集計結果の概要を述べる。なお、アンケート結果の詳細は付録Bに掲載している。

(1) 平成20年度卒業時アンケート

卒業生全員を対象に、無記名・自記式によるアンケート（マークシート方式）を卒業式の直後に実施した。対象者数は312人で、回収数は300人分（保健福祉学部120人、情報工学部100人、デザイン学部80人）、回収率は96.2%であった。

アンケート項目は、基本属性や全般的満足度のほか、以下の「教養的成長」、「専門的成長」、「総合的成長」の3領域を問う合計21項目で構成されている。

アンケート項目群

注) 回答は5段階評価

問 4～ 8. 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか。

問 4. 「コミュニケーション（語学教育）」系は

問 5. 「人間と文化の理解」系は、

問 6. 「現代社会に生きる」系は、

問 7. 「科学技術と環境」系は、

問 8. 「健康の維持・増進（体育を含む）」系は、

問 9～12. 次の学部教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか。

問 9. 「学部教育への準備」系は

問 10. 学部教育科目の講義は、

問 11. 実験・実習・演習は、

問 12. 卒業研究は、

問 13～20. あなたが在学中に身につけた能力について尋ねます。

問 13. 社会の一員として生きる力は、

問 14. 基礎学力は、

問 15. 専門的な知識と技術の広がりは、

問 16. 創造的に考える力は、

問 17. 自らをみがき発展させる力は、

問 18. コミュニケーションの力は、

問 19. ソーシャルスキル・ビジネスマナーは、

問 20. 職業人（プロ）となる意識は、

問 21. 全体的に本学の教育は満足でしたか。

(2) アンケート集計結果の概要

表 2.5-1 は、アンケート項目を 3 領域の成長感と「全般的な満足度」に集約して、卒業生全体の回答の分布状況を示したものである。

表 2.5-1 アンケート結果の概要（卒業生全体の回答の分布状況）

	保健福祉学部	情報工学部	デザイン学部	全体
教養的成長（問 4～ 8）	55.2～70.6	53.0～62.0	50.6～58.1	56.0～63.9
専門的成長（問 9～12）	64.8～86.9	69.0～85.5	67.5～91.9	66.9～87.0
総合的成長（問 13～20）	60.8～74.4	53.8～72.3	51.3～76.9	56.4～75.2
全般的満足（問 21）	78.3	70.0	72.2	73.9

本学での修学に関する「全般的な満足度（問 21）」については、否定的回答は 7%程度で全体としては 76%の卒業生が「やや満足」「大いに満足」と回答している。

学部や項目により多少の相違はあるが、本学の教育を通じての成長感を領域別にみると最も

肯定的に捉えられているのが「専門的成長（学部教育及び「学部教育への準備」系，問9～12）」である。学部教育科目群のなかでも、「実験・実習・演習」と「卒業研究」への満足度は高い。

一方，全学教育科目群（「学部教育への準備」系を除く）を通じての「教養的成長（問4～8）」は否定的回答よりは肯定的回答の方が多いものの，3領域の中では評価が低く，学生の認識の中では，自己の成長に結びつけにくいようすが窺える。

「総合的成長（問13～20）」の領域では，学部間や項目間の相違が比較的大きい（詳細は付録Bを参照）。「専門的知識・技術の広がり（問15）」は身についたと感じている学生が多い一方，「ソーシャルスキル・ビジネスマナー（問19）」に関しては他の項目に比べて評価がやや低い結果となっている。

付録

A. 入試統計（学部・大学院）

A-1 学士課程

一般選抜

単位；人

学部	学科	平成20年度						平成21年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	28	111	71	32	30	2.2	28	164	117	31	31	3.8
	栄養学科	30	86	49	32	31	1.5	30	162	108	34	29	3.2
	保健福祉学科	42	276	179	49	40	3.7	42	207	121	46	42	2.6
	学部計	100	473	299	113	101	2.6	100	533	346	111	102	3.1
情報工学部	情報通信工学科	37	618	273	114	57	2.4	37	745	346	90	37	3.8
	情報システム工学科	37	783	332	149	56	2.2	37	1,215	540	110	42	4.9
	スポーツシステム工学科	25	242	134	53	33	2.5	25	235	116	49	26	2.4
	学部計	99	1,643	739	316	146	2.3	99	2,195	1,002	249	105	4.0
デザイン学部	デザイン工学科	30	77	77	35	30	2.2	30	76	74	39	30	1.9
	造形デザイン学科	38	123	122	43	38	2.8	38	153	151	44	38	3.4
	学部計	68	200	199	78	68	2.6	68	229	225	83	68	2.7
合計		267	2,316	1,237	507	315	2.4	267	2,957	1,573	443	275	3.6

○倍率＝受験者数/合格者数

推薦に基づく選抜

単位；人

学部	学科	平成20年度						平成21年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学部	看護学科	12	27	27	13	13	2.1	12	33	33	13	13	2.5
	栄養学科	10	27	27	10	10	2.7	10	35	35	11	11	3.2
	保健福祉学科	18	29	29	20	20	1.5	18	35	35	18	18	1.9
	学部計	40	83	83	43	43	1.9	40	103	103	42	42	2.5
情報工学部	情報通信工学科	13	20	20	14	14	1.4	13	25	25	14	14	1.8
	情報システム工学科	13	23	23	15	15	1.5	13	25	24	14	14	1.7
	スポーツシステム工学科	15	30	30	16	16	1.9	15	29	29	15	15	1.9
	学部計	41	73	73	45	45	1.6	41	79	78	43	43	1.8
デザイン学部	デザイン工学科	10	9	9	9	9	1.0	10	20	20	10	10	2.0
	造形デザイン学科	12	37	37	12	12	3.1	12	37	37	12	12	3.1
	学部計	22	46	46	21	21	2.2	22	57	57	22	22	2.6
合計		103	202	202	109	109	1.9	103	239	238	107	107	2.2

○倍率＝受験者数/合格者数

第3年次編入学試験

単位；人

学 部	学 科	平成20年度				平成21年度			
		志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
保健福祉学部	看護学科	26	26	5	2	17	17	6	5
	栄養学科	11	11	2	1	30	30	3	3
	保健福祉学科	4	4	1	1				
	学 部 計	41	41	8	4	47	47	9	8
情報工 学部	情報通信工学科								
	情報システム工学科								
	スポーツシステム工学科	9	9	4	3				
	学 部 計	9	9	4	3				
デザイン学部	デザイン工学科	14	14	6	6	19	18	6	4
	造形デザイン学科	6	6	5	5	9	9	2	2
	学 部 計	20	20	11	11	28	27	8	6
合 計		70	70	23	18	75	74	17	14

○募集人員は、いずれも若干名

○情報通信工学科、情報システム工学科は平成20年度募集せず

○保健福祉学科及び情報工学部3学科は平成21年度募集せず

A-2 大学院課程

博士前期課程・修士課程

単位；人

研 究 科	専 攻	平成20年度						平成21年度					
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学 研究科	看護学専攻	7	6	6	6	6	1.0	7	11	11	9	9	1.2
	栄養学専攻	6	4	4	3	3	1.3	6	9	9	8	6	1.1
	保健福祉学専攻	7	9	9	9	8	1.0	7	9	9	8	6	1.1
	研究科計	20	19	19	18	17	1.1	20	29	29	25	21	1.2
情報系工学 研究科	電子情報通信工学専攻	20	30	30	27	27	1.1	20	27	26	25	24	1.0
	機械情報システム工学専攻	20	46	46	36	35	1.3	20	24	24	23	21	1.0
	研究科計	40	76	76	63	62	1.2	40	51	50	48	45	1.0
デザイン学 研究科	ビジュアルデザイン学専攻	8	11	11	10	9	1.1	8	6	6	5	5	1.2
	工芸工業デザイン学専攻	8	7	7	7	7	1.0	8	7	7	7	5	1.0
	研究科計	16	18	18	17	16	1.1	16	13	13	12	10	1.1
合 計		76	113	113	98	95	1.2	76	93	92	85	76	1.1

○倍率＝受験者数/合格者数

博士後期課程

単位；人

研 究 科・専 攻	平成20年度						平成21年度					
	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
保健福祉学研究科・保健福祉科学専攻	3	7	7	7	7	1.0	3	7	7	7	7	1.0
情報系工学研究科・システム工学専攻	6	5	5	5	5	1.0	6	4	4	4	4	1.0
合 計	9	12	12	12	12	1.0	9	11	11	11	11	1.0

○倍率＝受験者数/合格者数

B. 卒業時アンケートの詳細

調査項目：以下の集計表に示す 21 項目

調査時期：平成 21 年 3 月 24 日

調査対象：平成 20 年度卒業生（312 人）

回収率：96.2%（保健福祉学部 120 人，情報工学部 100 人，デザイン学部 80 人）

集計方法：学部別・項目ごとの有効回答の範囲内での単純集計（未回答を除く）

問 1. あなたの入学年は、

- ① 平成 19 年，② 平成 18 年，③ 平成 17 年，④ 平成 16 年，⑤ 平成 15 年以前

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤
保健福祉学部	1	1	118	0	0
情報工学部	2	0	86	7	5
デザイン学部	3	2	69	3	3
全 体	6	3	273	10	8

問 2. 本学に合格した入学試験の種別は、

- ① 前・中・後期日程入試，② 推薦入試，③ 編入学，④ 再入学，⑤ 私費外国人留学生・帰国子女特別選抜・社会人特別選抜

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤
保健福祉学部	82	36	2	0	0
情報工学部	74	24	1	1	0
デザイン学部	55	20	5	0	0
全 体	211	80	8	1	0

問 3. 卒業後の進路は、

- ① 就職（専攻と関連する職業），② 就職（専攻と関連しない職業），③ 進学（大学院・編入），
④ 進学（再入学・専攻の変更），⑤ 未定・その他

(単位：人)

学 部	回答①	回答②	回答③	回答④	回答⑤
保健福祉学部	83	28	4	2	3
情報工学部	36	13	47	4	0
デザイン学部	45	10	8	2	14
全 体	164	51	59	8	17

問 4～21 については、次ページに一覧を示す（回答は 100 点換算で表示している）。

平成20年度「卒業時アンケート」の結果	看護学科		栄養学科		保健福祉学部		保健福祉学部		情報通信工学科		情報システム工学科		情報工学科		ビジネスデザイン学部		工学工業デザイン学部		全体	
	対象者数	41	42	43	126	53	50	103	34	49	83	312								
回答者数	38	42	40	120	52	48	100	32	48	80	300									
回答率(%)	92.7	100.0	93.0	95.2	98.1	96.0	97.1	94.1	98.0	96.4	96.2									

【教養的成長】 次の全学教育科目群は、あなたの成長にどの程度意義がありましたか

「コミュニケーション(語学教育)」系は	65	58	69	64.2	56	60	58.3	57	59	57.9	60.5
「人間と文化の理解」系は	53	58	64	58.3	56	49	53.0	58	58	58.1	56.5
「現代社会に生きる」系は	58	55	63	58.8	60	52	56.3	56	59	57.8	57.7
「科学技術と環境」系は	51	62	53	55.2	63	60	61.3	49	52	50.6	56.0
「健康の維持・増進(体育を含む)」系は	77	68	67	70.6	66	57	62.0	58	55	56.3	63.9
教養的成長の平均	60.7	60.4	63.3	61.4	60.3	55.8	58.2	55.6	56.5	56.2	58.9

【専門的成長】 次の教育科目群(主に学部教育に関するものは、あなたの成長にどの程度意義がありましたか)

全学教育科目群「学部教育への準備」系は	68	62	65	64.8	70	68	69.0	70	66	67.5	66.9
学部教育科目の講義は	81	82	73	78.5	78	74	76.0	78	77	77.5	77.4
実験・実習・演習は	94	88	79	86.9	84	82	83.3	91	93	91.9	87.0
卒業研究は	86	87	82	84.8	86	85	85.5	86	87	86.6	85.5
専門的成長の平均	82.1	79.8	74.5	78.8	79.6	77.2	78.4	81.1	80.7	80.9	79.2

【総合的成長】 あなたが本学在学中に身につけた能力について尋ねます

社会の一員として生きる力は	72	76	66	71.7	65	60	63.0	64	64	64.1	66.8
基礎学力は	68	73	58	66.5	68	57	62.5	58	47	51.3	61.1
専門的な知識と技術の広がり	81	83	66	76.6	74	70	72.3	77	77	76.9	75.2
創造的に考える力は	70	71	66	69.0	65	65	65.3	77	77	76.6	69.8
自らをみがき発展させる力は	69	73	64	68.8	69	67	68.0	71	71	71.3	69.2
コミュニケーションの力は	77	73	74	74.4	66	67	66.3	67	66	66.6	69.6
ソーシャルスキル・ビジネスマナーは	57	63	63	60.8	56	52	53.8	54	53	53.1	56.4
職業人(プロ)となる意識は	78	68	62	69.0	63	63	62.8	65	68	66.9	66.3
総合的成長の平均	71.5	72.5	64.7	69.6	65.7	62.7	64.2	66.6	65.3	65.8	66.8

【全般的満足】 全般的に本学の教育は満足でしたか

全般的に本学の教育は満足でしたか	82.9	78.0	74.4	78.3	75.5	64.1	70.0	67.2	75.5	72.2	73.9
------------------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

注)アンケートの集計結果は、5段階評価の1(否定)を1、5(肯定)を100と換算した値を示す

C. 全学的就職支援の実施状況

C-1 全学就職ガイダンスの実施状況

実施日	ガイダンス等の題目・講師等	参加学生数
6月18日	「公務員ガイダンス」 東京アカデミー岡山校	51
6月25日	「就職活動の流れと準備について」 エン・ジャパン(株)	140
10月15日	「就職活動の開始にあたり」 (株)ディスコ	240
11月12日	「人事の視点徹底研究」 (株)リクルート	105
11月19日	「エントリーシート対策講座」 (株)毎日コミュニケーションズ	110
12月 3日	「1・2年次向け就職ガイダンス」 (株)毎日コミュニケーションズ	31
1月21日	「就職活動直前ガイダンス」 おかやま若者就職支援センター	97

C-2 自己分析検査の実施と解説

実施日	検査名・実施機関等	参加学生数
7月 2日	自己分析検査 (有)学匠	112
7月 9日	自己分析検査解説講座 (有)学匠	

C-3 各種模擬テストの実施

実施日	試験名・実施機関等	参加学生数
4月30日	公務員模擬試験 東京アカデミー岡山校	33
11月26日	S P I 模擬テスト (株)ジェイ・ブロード	66
11月27日	S P I 模擬テスト (株)ジェイ・ブロード	39
1月22日	SPI+一般常識・時事Web模擬テスト (株)毎日コミュニケーションズ	62

C-4 就職活動バス（合同企業説明会へのバス）の運行

運行日	合同企業説明会の主催/会場	参加学生数
11月28日	(株)ディスコ/インテックス大阪	42
1月30日	(株)毎日コミュニケーションズ/京セラドーム大阪	18

C-5 就職相談員による就職相談

相談日時	内 容 等
火曜日 金曜日 11:00～ 15:00	キャリアカウンセラーの資格を有する就職相談員による各種就職相談を実施。 ◇相談内容等： ・各種就職ガイダンスの補講 ・実践模擬面接の実施 ・履歴書・エントリーシート等に関する相談 など H21年度相談件数360件

D. 国際交流

本学は中期目標として「国際化に対応する人材を育成するため、国際交流協定を締結している外国の大学との間で、学生や教員の相互派遣等による教育・研究交流を推進する」としている。これまで英国国立バンガー大学、韓国又松大学校、中国四川大学（中国四川省成都市）の学術交流協定校へ短期語学・文化研修として学生を派遣してきた。一方、平成19年より海外から日本語学・文化研修の目的で学生を受け入れるようになった。今年度は、新型インフルエンザの流行と経済情勢の悪化による影響を受け、本学学生の英国、韓国、中国への語学研修も本学における日本語学・文化研修の両研修が残念ながら応募が少なく中止となった。各研修の概要を次に示す。一方、デザイン学部卒業・修了制作展と同時に実施される国際交流展は、本年も3月2日から8日まで開催された。

D-1 平成21年度英国語学・文化研修の計画概要

- ① 期間：平成21年8月19日（水）～9月16日（水）
- ② 研修内容：英国国立バンガー大学における英語力向上、並びに英国文化体験など。
- ③ 募集人員：7名程度以上
- ④ 費用 48万2千円（参加10名以上）、52万2千円（参加7名～9名）
上記の費用に往復航空運賃、授業料、ホームステイ費、フィールド・トリップ（交通費） 空港送迎運賃、諸経費などが含まれている。

D-2 2009年度韓国語学・文化研修の計画概要

- ① 期間：平成21年8月2日（日）～8月16日（日）
- ② 研修内容：又松大学校（韓国大田広域市東区）にて韓国語学研修、韓国文化体験、ホームステイ、文化史跡探訪など。
- ② 募集人員：20名程度（最少催行人員10名）
- ③ 費用 13万4千円程度
上記の費用に往復航空運賃、韓国入国税、見学地での宿泊費、見学費、見学に伴う交通費、学生宿舎代、朝・昼食代などが含まれている。

D-3 2009年度中国語学・文化研修の計画概要

- ① 期間：平成21年8月30日（日）～9月13日（日）
- ② 研修内容：四川大学（中国四川省成都市）における中国語学研修、並びに中国文化体験など。
- ③ 募集人員：20名程度（最少催行人員10名）
- ④ 費用 13万4千円程度

上記の費用に往復航空運賃，中国入国税，見学地での宿泊費，見学費，見学に伴う交通費，学生宿舎代，朝・昼食代などが含まれている。

D-4 日本語学・文化研修の計画概要

- ① 期間：平成 21 年 7 月 21 日（火）～8 月 3 日（月）
- ② 研修内容：本学と友好関係にある韓国又松大学校の学生に日本語学研修及び本学学生等との交流や岡山県内の史跡・文化財見学等を行い，この研修を通じて相互理解を深めることである。
 - ・日本語学研修：日常会話を中心に，学生が興味を持つような内容で計画している。また，学生のレベルや参加者・人数により 2 クラスに編成することもあります。
 - ・本学学生等との交流：本学学生等との交流会を計画している。
 - ・日本文化研修：岡山県内の史跡・文化財見学を計画している。
- ③ 募集人員：20 名程度
- ④ 費用 7 万円
内訳）語学・文化研修費：10,000 円（テキスト代 500 円及び文化体験費用を含む）
宿泊・食費（朝,夕）：60,000 円

D-5 第 5 回 岡山県立大学，韓国又松大学校，内蒙古大学芸術学院 国際交流展

(1) 概要

岡山県立大学デザイン学部，デザイン学研究科の卒業修了制作展と同時に開催される，国際交流展は本年度で第 5 回となり，韓国又松大学校建築学部が参加し，学生の作品が展示された。また，内蒙古大学芸術学院芸術設計学部の視覚伝達系，環境設計系，服装設計系，彫刻系，環境芸術デザイン系の学生と教員の作品が展示された。

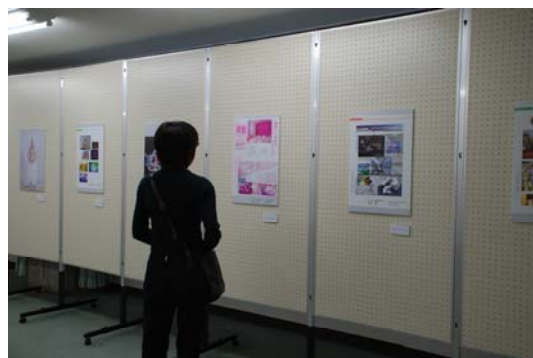
(2) 実施内容

- 日 程 平成 22 年 3 月 2 日（火）～3 月 7 日（日）
場 所 岡山県天神山文化プラザ
展示作品 韓国又松大学校建築学部学生作品 4 点
中国内蒙古大学芸術学院 学生・教員作品 24 点

韓国又松大学校作品展示



内蒙古大学芸術学院作品展示



E. 高大連携協定に基づく高等学校への講師派遣及び生徒の受入

E-1 講師派遣

高校名	担当学部, 教員		講義内容等	受講生の 学年・人数	実施日
	学部	教員			
玉野光南高等学校	デ	嘉数教授	コンテンツ市場で何が起こるか ～Web と放送～	2,3 年生・10 名	H21.4.21
	情	忻教授	制御とロボティクス	1 年生・40 名	H21.5.26
	デ	奥野教授	デザインの目指すもの	2 年生・9 名	H21.12.7
	情	但馬准教授	システム制御	1 年生・40 名	H22.3.16
	デ	嘉数教授	コンテンツビジネス, Web デザイン		
倉敷工業高等学校	デ	難波准教授	スライドレクチャー	1 年生・40 名	H22.2.23
		島田講師			
総社高等学校	情	稲井教授	情報技術の進展, 機械を制御するコンピュータ, 情報技術が社会に及ぼす影響	2 年生・28 名	H21.6.15
		横田教授	情報処理の特徴, データベースの活用, コンピュータと情報通信		H21.11.16
岡山城東高等学校	情	渡辺教授	人を引き込む身体的コミュニケーション技術	2 年生・60 名	H21.7.13
岡山工業高等学校	デ	大河内教授	学生たちが挑む, 新しい焼き物のデザイン	2 年生・8 名	H21.7.18
		金丸教授	生活を楽しむ生活雑貨		
		作元助教	ワークショップ説明会		
岡山東商業高等学校	デ	西田助教	新製品開発とパッケージデザインの提案	1 年生・70 名	H21.9.11, 28, 12.15
倉敷南高等学校	保	近藤准教授	福祉の仕事と研究	1・2 年生 32 名	H21.9.15
	情	渡辺教授	人を引き込む身体的コミュニケーション技術	1・2 年生 23 名	
笠岡高等学校	保	石村准教授	看護学科の展望	2 年生・23 名	H21.10.6
		岸本教授	栄養学科の紹介及び管理栄養士の役割について	2 年生・16 名	
林野高等学校	保	村上教授	ナイチンゲールの看護理論の特徴	1 年生・34 名	H21.10.9
井原高等学校	デ	熊澤講師	地域とデザイン	1・2 年生 13 名	H21.10.29

邑久高等学校	デ	嘉数教授	TV から CM が消える日	1・2年生 20名	H21.10.30
岡山一宮高等学校	情	迫教授	笑い与健康	2年生・50名	H21.11.9
矢掛高等学校	情	金川教授	工学部の概要と進路に向けて	2年生・18名	H21.11.12
倉敷古城池高等学校	保	高橋教授	学部学科の概要と研究紹介	2年生・14名	H21.11.19
	情	稲井教授	工学部の概要	2年生・27名	
金光学園高等学校	保	岡崎准教授	母性看護学と看護研究	2年生・15名	H21.11.27
	デ	奥野教授	デザインの役割	2年生・6名	

E-2 生徒の受入

高校名	担当学部, 教員		講義内容等	受講生の学年・人数	実施日
	学部	教員			
倉敷工業高等学校	デ	難波准教授	学部施設見学	2年生・7名	H21.5.22
		島田講師			
岡山工業高等学校	デ	金丸教授	セラミックデザイン演習	2年生・7名	H21.7.25, 26 8.2, 8
		作元助教			
		吉原教授	※シルクスクリーン演習	2・3年生 13名	H21.11.16, 30 12.12, 13
総社高等学校	デ	森下教授	ユニバーサルデザイン1・2	2年生・18名	H21.9.15, 10.6
		山下教授	カラーコーディネート1・2		H21.10.13, 27
		山田教授	インテリアデザイン1・2		H21.11.17, 12.1

※ 講義内容等の※印は連携講座（高校が単位認定を行うことができるもの）

F. 高等学校からの訪問

月 日	高 等 学 校	訪 問 者		内 容
		学年	人数	
5月8日	呂久高等学校	2	37	学部概要説明, 施設見学, 講義見学
6月5日	呂久高等学校	3	17	大学概要説明, 講義聴講
7月16日	落合高等学校 (看護科)	3	40	学科 (看護) 説明, 施設見学, 体験講義 (森教授)
7月16日	新見高等学校	1	67	大学概要説明, 講義聴講
7月22日	玉野光南高等学校	1	21	学部 (情報) 概要説明, 施設見学
9月30日	善通寺第一高等学校 (デザイン科)	1	35	学部 (デザイン) 概要説明, 施設見学

G. 学生・クラブの表彰

G-1 学生の表彰

受賞者			受賞した賞	
保健福祉 学部	栄養学科	4年	森中朋子	(社)日本農芸化学会中四国支部学生奨励賞
			田中あや	
	保健福祉学科		深田悠紀	総社市奨励賞
情報工学部	情報通信工学科	4年	末宗明恵	日本オペレーションズ・リサーチ学会 中国・四国支部長賞
			平尾嘉菜	第8回国際電卓技能競技大会岡山県大会 優勝
	情報システム 工学科		太田俊介	日本経営工学会中国四国支部 研究発表賞 日本経営工学会中国四国支部 支部長賞
			スポーツシステ ム工学科	村井聡紀
情報系工学 研究科	電子情報通信 工学専攻	2年	黒江明弘	電子情報通信学会インターネットアーキ テクチャ研究会学生研究奨励賞
	機械情報 システム工学 専攻	1年	テ ィ ッ ト ラ タ ナ	IEEE Hiroshima Section HISS 優秀研究賞
			原 一 史	学生ケータイあわ〜ど 2009 佳作賞
		2年	長澤崇裕	2009 年春季応用物理学講演奨励賞
			山本直幸	第 18 回 SICE 中国支部学術講演会奨励賞
			眞角祐樹	平成 21 年度軽金属希望の星賞
井芝俊博	軽金属学会中国四国支部奨励賞			
情報系工学 研究科	システム工学 専攻	1年	仮屋崎 弘昭	2009 年春季応用物理学学会中国四国支部 学術講演会奨励賞

		3年	瀬島吉裕	第11回 IEEE 広島支部学生シンポジウム HISS 優秀研究賞 仁科賞
デザイン 学部	デザイン工学科	4年	上藺千早	日本インテリア学会 中国・四国支部長賞
			石田希美	総社市奨励賞
	造形デザイン 学科	4年	福家七美	日本タイプグラフィ年鑑 2010 入選
			福武知子	
		4年	原 千尋	ライカ同盟協働プロジェクト クラフト 2009 入選
		4年	横田早紀	ライカ同盟協働プロジェクト クラフト 2009 入選
		3年	佐々木愛	2009年度新聞広告クリエイティブ コンテスト 優秀賞・学生賞
		3年	高橋宏明	第3回メディア・ユニバーサルデザイン コンペティション最優秀賞（グランプリ）
		2年	高橋 愛	第3回メディア・ユニバーサルデザイン コンペティション 優秀賞
		2年	酒江夏美	第3回メディア・ユニバーサルデザイン コンペティション 佳作
デザイン学 研究科	工芸工業 デザイン学 専攻	2年	中西芙美	木下空太郎デザイン大賞 包装紙デザイン部門 優秀賞
		1年	吉田早織	第16回ヤングセラミストミーティング in 中四国 作品部門 大賞

G-1 クラブの表彰

サークル名	大会名	成績
AMC!	オールJA コンテスト	中国地方 1位
サッカー部	岡山県学生サッカーリーグ (1部)	3位
水泳部 (青木絵里香)	第40回中国四国学生選手権水泳競技 大会	女子 50m自由形 6位
	第39回中国四国国公立大学水泳競技 大会	女子 50m自由形 4位
水泳部 (古井 史歩)	第40回中国四国学生選手権水泳競技 大会	女子 100m自由形 8位
	第39回中国四国国公立大学水泳競技 大会	女子 100m自由形 6位
水泳部 (岡崎 理沙)	第40回中国四国学生選手権水泳競技	女子 100m平泳ぎ 5位

	大会	女子 200m 平泳ぎ 4 位
	第 39 回中国四国国公立大学水泳競技大会	女子 200m 平泳ぎ 4 位 女子 100m 平泳ぎ 5 位
水泳部	第 40 回中国四国学生選手権水泳競技大会	女子 200m リレー 6 位
		女子 400m メドレーリレー 8 位
		女子総合 8 位
第 39 回中国四国学生選手権水泳競技大会	女子 200m リレー 6 位	
	女子 400m メドレーリレー 7 位	
	女子総合 7 位	
トレーニングサークル (増田琢)	春期関西学生パワーリフティング選手権大会	90kg 級 2 位
	全日本学生パワーリフティング選手権大会	90kg 級 5 位
バスケットボール部	第 27 回総社市バスケットボールフェア	優勝
バレーボール部 (男子)	第 70 回中国大学バレーボールリーグ戦	秋季大会チャレンジリーグ 2 位
	第 53 回中国四国バレーボール選手権	ベスト 16
バレーボール部 (女子)	第 70 回中国大学バレーボールリーグ戦	秋季大会チャレンジリーグ 3 位
	平成 21 年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会 岡山県ラウンド	3 位 (3 部リーグ)
フットサルサークル	ユニライフ大会	2・3・4 位
	ワンナイト男子大会	優勝
マウンテンバイク部サエラ	天満屋ハピータウンカップ	ソロ 1 位・チーム 2 位
陸上競技部 (岡宗一郎)	第 63 回中国四国学生陸上競技選手権大会	男子 100m 優勝
	第 55 回岡山県陸上競技選手権大会	男子 100m 優勝
陸上競技部 (山下洋夢)	第 55 回岡山県陸上競技選手権大会	男子棒高跳 3 位
陸上競技部 (岡宗一郎)	第 18 回岡山県実業団・学生対抗陸上競技選手権大会	男子 100m 優勝
	平成 21 年度岡山県体育大会 兼 第 64	男子 200m 優勝
陸上競技部 (小川弘晃)	回国民体育大会岡山県最終選考会	男子砲丸投 3 位
陸上競技部 (岡宗一郎)	第 63 回中国五県陸上競技選手権大会	男子 100m 2 位

ロボット研究サークルメ ヒヤニカ	レスキューロボットコンテスト 競技会	2位
---------------------	-----------------------	----

H. 委員会等協議事項

H-1 教育研究活動委員会

第1回（平成21年4月16日）

1. 全学教育について
2. 総社市インターンシップについて
3. 語学・文化研修の募集について（案）

第2回（平成21年5月14日）

1. 全学教育について
2. 岡山県立大学履修規定の一部改正について
3. 平成21年度国際交流推進助成費について

第3回（平成21年6月11日）

1. 教育力向上支援事業について
2. 岡山県立大学大学院学則の一部改訂について
3. 全学教育について
4. 本年度の課題について
5. 語学・文化研修について

第4回（平成21年7月9日）

1. 学生への修学支援の充実について
2. 転学について
3. 岡山県立大学附属図書館利用規程等の一部改正について
4. 研究室等備付（貸出）資料の蔵書点検の実施について
5. 語学・文化研修について

第5回（平成21年9月3日）

1. 全学教育について
2. GPA制度について
3. 保護者への成績通知について
4. 転学について
5. 学生異動の通知について

第6回（平成21年10月8日）

1. 韓国又松大学校からの転学生に係る選考方法等について
2. 平成22年度大学院授業開講準備に係る作業日程について
3. 平成22年度教務・学生生活関係スケジュール（大学院）について
4. 教員教養カリキュラム委員会（仮称）の設置について

第7回（平成21年11月12日）

1. 大学機関別認証評価の訪問調査における指摘事項について
2. 平成22年度大学院の履修案内について
3. 平成22年度教育力向上支援事業について
4. 平成22年度の全学講義について
5. 各学部の長期欠席者の対応について

第8回（平成21年12月10日）

1. 韓国又松大学校との国際交流協定について
2. 新型インフルエンザに係る取扱いについて
3. 研究室等備付(貸出)図書の蔵書点検結果及び対応について

第9回（平成22年1月14日）

1. 岡山県立大学大学院新入生オリエンテーション日程について
2. 平成22年度大学院授業開講計画について
3. フレッシュマン特別講義について
4. 岡山県立大学学位規程の一部改正について
5. 韓国又松大学校との交流協定について

第10回（平成22年2月4日）

1. 平成22年度大学院授業開講計画について
2. 大学院修士学位論文審査基準について
3. 平成22年度臨時に設ける授業科目について
4. 国際交流推進助成費について
5. 岡山県立大学学則の一部改正について
6. 附属図書館、情報教育センターの業務展開について

第11回（平成22年3月11日）

1. 岡山県立大学履修規程の一部改正について
2. 岡山県立大学大学院履修規程の一部改正について

3. 岡山県立大学倫理審査規程の一部改正について
4. 教育力向上支援事業について
5. 国際交流推進助成費について
6. 平成 22 年度英国語学文化研修について

H-2 教務専門委員会

第 1 回（平成 21 年 5 月 14 日）

協議事項

1. 平成 21 年度教務専門委員会開催日程について
2. 平成 22 年保健福祉学部 栄養学科 教職教育科目の開講計画について
3. 新入学生の入学直後の休学の取扱いについて

第 2 回（平成 21 年 7 月 9 日）

協議事項

1. 平成 22 年度授業開講計画等協議スケジュールについて
2. 平成 22 年度全学教育科目の開講計画への要望等について
3. 授業科目等の英語表記について

報告事項

1. 第 57 回中国・四国地区大学教育研究会の報告について
2. 教務システムの改良等について
3. 博物館法施行規則の改正について

第 3 回（平成 21 年 9 月 10 日）

協議事項

1. 平成 22 年度全学教育科目開講計画について
2. 教務関係(後期)スケジュールについて

報告事項

1. 平成 22 年度保健福祉学部栄養学科教職教育科目の開講計画の修正について
2. 履修登録内容修正に係る Web 登録手続きについて

第 4 回（平成 21 年 10 月 8 日）

協議事項

1. 平成 22 年度全学教育科目開講計画及び時間割について
2. 平成 22 年度入学生の卒業要件について
3. 平成 22 年度学部教育科目開講計画について

4. 平成 22 年度教務・学生生活の日程について
5. 平成 22 年度学部教育科目時間割編成について

第 5 回（平成 21 年 11 月 12 日）

協議事項

1. 平成 22 年度全学教育科目開講計画について
2. 平成 22 年度学部教育科目時間割について
3. 平成 22 年度シラバスの作成について
4. 4 年次生に係る年度末日程について
5. 「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について

第 6 回（平成 21 年 12 月 10 日）

協議事項

1. 平成 22 年度入学生用履修案内について
2. 平成 22 年度臨時開講科目について
3. 授業科目の英語表記について

報告事項

1. 「大学コンソーシアム岡山」への提供科目について

第 7 回（平成 22 年 1 月 14 日）

協議事項

1. 平成 22 年度全学教育科目時間割の変更について
2. 授業科目の英語表記について
3. 平成 22 年度新入生オリエンテーション日程について

第 8 回（平成 22 年 2 月 4 日）

協議事項

1. 平成 22 年度学部教育科目開講計画及び時間割の変更について
2. 平成 22 年度臨時開講科目について
3. 平成 22 年度履修案内について
4. メディアを利用した授業について
5. フレッシュマン特別講義について

報告事項

1. 「岡山オルガノン」について

第 9 回（平成 22 年 3 月 11 日）

協議事項

1. 平成 22 年度開講計画等の変更について
2. 「岡山オルガノン」について
3. 平成 22 年度履修案内の変更について
4. 教職課程に係る「履修カルテ」について

報告事項

1. 平成 22 年度新入生オリエンテーション日程について
2. 平成 22 年度履修登録について

H-3 全学教育研究機構教授会

第 1 回（平成 21 年 8 月 6 日）

1. 協議事項
 - ① 平成 22 年度全学教育開講科目について
 - ② 新規開設科目について
 - ③ 「学部教育への準備」科目の見直しについて
2. 報告事項
 - ① デザイン学部，情報工学部関係人事の進捗状況について
 - ② 備品に関する調査について

第 2 回（平成 21 年 10 月 1 日）

1. 協議事項
 - ① 平成 22 年度全学教育開講科目について
 - ② カテゴリー責任者の役割について
 - ③ その他

第 3 回（平成 21 年 12 月 3 日）

1. 協議事項
 - ① 非常勤講師の採用について
 - ② その他
2. 報告事項
 - ① デザイン学部関係人事の結果について

第 4 回（平成 21 年 12 月 24 日）

1. 協議事項
 - ① 機構兼務教員の変更について
 - ② その他

2. 報告事項

① 情報工学部関係人事の結果について

I. 『学生による授業評価アンケート』の改善に関する調査の詳細

調査時期：平成 21 年 10 月 7 日～14 日

調査対象：赴任直後の教員や授業主担当ではない助教・助手を除く 139 人（全教員 166 人）

集計方法：単純集計（人数，％）および記述内容の要約

Q1. 回答者の属性（回答者数 56 人）

所属学部	教授	准教授・講師	助教・助手	不明
保健福祉	7 人	13 人	2 人	
情報工学	11 人	5 人	1 人	1 人
デザイン	5 人	5 人	2 人	1 人
不明	1 人	1 人	1 人	

* 赴任直後の教員や授業主担当者でない助教・助手を除いた場合の回収率は 40.3%

Q2. 現行の授業評価アンケートの実施において、以下の条件の授業は原則として対象から除かれていますが、実施した方がよいとお考えのものはどれですか。また、その理由をご記入ください。

履修登録 10 人以下の科目	17 人	30.4%
学外実習を伴う科目	10 人	17.9%
オムニバス形式の科目	14 人	25.0%
スポーツ I・II	9 人	16.1%
集中授業科目	21 人	37.5%
1単位の科目(講義)	19 人	33.9%
廃止予定の科目	6 人	10.7%

記述回答者数と記述内容	40 人	71.4%
全科目で実施すべき、等	35 人	62.5%
実施しない方がよい、その他	5 人	8.9%

Q3. 上記 Q2 で示した授業について、学生による授業評価を何らかの形で実施するとして、どのような方法があるでしょうか。具体的なお考えがあればご記入ください。

記述回答者数と記述内容	27 人	48.2%
共通の様式がよい	13 人	23.2%

自由記述式がよい	7人	12.5%
評価項目の変更, その他	7人	12.5%

Q4. 現在, 授業評価アンケートの対象となっているが, その対象から除いた方がよいとお考えの授業がありますか. ある場合は, その条件と理由をご記入ください.

ない	45人	80.4%
ある	2人	3.6%
未回答・その他	9人	16.1%

Q5. 現行の授業評価アンケートは毎学期末に行っていますが, 実施頻度としては以下のどれが望ましいとお考えですか.

毎年前期・後期とも実施	34人	60.7%
隔年で前期・後期交互に実施	13人	23.2%
未回答・その他	9人	16.1%

Q6. 現在の授業評価アンケートの以下の15の設問からなっています. このうち, 修正または除外した方がよいとお考えの設問はどれですか. ある場合は理由や修正案をご記入ください.

1.受講して知的刺激を受けましたか	3人	5.4%
2.真剣に受講しましたか	13人	23.2%
3.シラバスにそった授業でしたか	6人	10.7%
4.教員の声, 話し方は適切でしたか	2人	3.6%
5.板書の書き方や文字は見やすかったですか	7人	12.5%
6.重要なところを強調してくれましたか	3人	5.4%
7.教員の熱意が感じられましたか	4人	7.1%
8.学生の理解度に注意していましたか	4人	7.1%
9.予習・復習を促す配慮はされていましたが	10人	17.9%
10.授業の進め方は丁寧でしたか	4人	7.1%
11.授業の準備は十分されていましたか	5人	8.9%
12.学生の質問にきちんと対応していましたか	3人	5.4%
13.私語等に対する配慮は適切でしたか	9人	16.1%
14.教室等の状態や学生数は適切でしたか	16人	28.6%
15.総合的に判断して授業に満足しましたか	2人	3.6%

記述回答者数	40人	71.4%	記述内容
1. 受講して知的刺激	4人	7.1%	学生側の問題, 語学系には相応しくない, 「知的刺激」を「興味」に変えては
2. 真剣に受講...	16人	28.6%	学生側の問題, 教員の評価と関係がない, 設問の意図が不明, 評価が1,2の学生の回答は問題あり
3. シラバスに...	4人	7.1%	シラバスを読んでいない・関心がない, シラバス通りがよいのか
4. 教員の声・話し方	0人	0.0%	
5. 板書の書き方...	5人	8.9%	ノートは学生が書くもの, PCによる教示, 板書は補助
6. 重要なところ強調	1人	1.8%	不要
7. 教員の熱意...	2人	3.6%	「熱意」とは?, 他の項目で十分
8. 学生の理解度...	2人	3.6%	学生の姿勢次第, 学生に都合の良い項目?
9. 予習・復習を促す	6人	10.7%	別な表現で促している, 予習・復習が不要な授業がある, 学生の自覚の問題, 必要か再検討すべき
10. 授業の進め方	2人	3.6%	「丁寧」を「適切」に, 学生に理解度による
11. 授業の準備...	3人	5.4%	学生には判断しにくい, 不要
12. 学生の質問...	2人	3.6%	学生は質問をほとんどしない, あれば答える
13. 私語に対する...	2人	3.6%	私語がない場合も多い, 表現を変える
14. 教室の状態...	15人	26.8%	教員の問題ではない, 対応できない, 意図が不明, 大学(教務)上の問題
15. 授業満足度	4人	7.1%	漠然としている, 不要, 必要
その他	6人	10.7%	項目を減らす, 学生の問題は別途扱う, 記名式にする, 項目をカテゴリ別に分ける, 自由記述でよい

Q7. 上記に示した設問以外に, 追加した方がよいとお考えの設問がありましたら, 具体的にご記入ください。

記述回答者数と記述内容	12人 (21.4%)
真剣に受講していない学生は低く評価する傾向があるのでは?	
記名式を検討しては?(無記名には不信感もある)	
学生の受講態度に関する項目が少なすぎる, 他大学は多い	
教員との相性が評価に繋がっているのでは?	
「おもしろかったか」「理解できたか」も問うべき, 「授業で得られたものを回答させる」	
「今後, 役立つ」「授業に主体的に参加できた」などの項目を追加	
「他の授業と比較して, よいところ, わるいところを答える」	
「真摯に責任を持って回答するか」をまず問うべき	

Q8. 現在行っている授業評価アンケートの先生方へのフィードバックの仕方や評価点等の情報に何か不都合や問題点があるとお考えの場合は, 具体的にご指摘いただき, 改善案も併せてご記入ください。

記述回答者数と記述内容	21人 (37.5%)
平均値や標準偏差の意味は？	
主要5項目の評価で十分だ	
結果をみても、どう対処すればよいかわかりづらい	
項目を分類して示して欲しい	
カード(回答用マークシート)の返却は不要	
学生がまじめに応えたアンケートでないと意味がない	
過去のデータも併せて示して欲しい	
授業評価と成績との関連をみる必要がある(そのためには記名式とする)	
毎回の授業についても丁寧に調べている(感想文など)	
教員の授業改善も聞いては？	
学生にもフィードバックすべき(3件)	
教育課程との関連で学科、学部単位の評価も検討すべき	

Q9. 授業評価アンケートの評価結果に基づいて、授業内容、教材、教育技術等の改善に努めたことがありますか。ある場合は具体的な改善事例をご紹介ください。

ない	40人	71.4%
ある	10人	17.9%
未回答・その他	6人	10.7%

評価結果に基づいた改善事例(記述)
レディネステスト、小テストなどを取り入れた、
予習を促すため資料は前の週に配布した、感想文を提出させた
予習・復習を強調した。質問を増やし、参加意欲を促した
教材・内容等を変更した、独自の工夫をした
100人を超える授業では、対応が難しい面もある(受講者数の制限を)
板書の工夫(字の大きさ、配置、図式表現など)、ノートテイクのための時間配分
見本やデモを増やした、PCプレゼンを活用した
難しい内容や抽象な内容について、検討した
難しいが、話し方を変えるようにした
常に教材を新しいものにするよう努めた
もっと教員研修を増やすべきでは

● ご協力ありがとうございました。なお、その他、ご意見やご提案がございましたら、別途それらを記したものを(様式は自由)を添付ファイルとしてご返送ください。

- アンケートの実施は授業担当者以外がすべき。
- 学生のいい加減な評価や非常識な言動があった。
- 学生の気分を評価しているところがあるのでは。
- 教員評価には授業評価以外の教員の教材研究とか指導努力も加える。
- 現行の授業評価アンケートには少なくとも以下の 2 つの問題点がある。アンケートの目的が必ずしも明確ではない。試行とはいえ、授業評価を教員評価(教員の業務評価)に用いるということ。教員にも学生にも十分に説明がなされる必要がある。
- 1.教員の業績評価に関わってくるのであれば、アンケートの抜本的な改革がぜひとも必要。2. 個々のアンケート項目の是非を問う今回の調査は、抜本的な改善に至らないのでは。3.抜本的な改善策としては、①どのような学生がどのような回答を示しているか、その関係性を調査して欲しい、②どのような授業枠かを指数として加える(受講人数、教員の立場、教室や教育環境、講義か演習かの区別など変数に加える)。③以上、①と②のようにしても公正な評価に結び付くかは結局疑問。ですから、アンケートの取り方を見直す。アンケートは原則記名式にした方がよいのでは。そうすれば、理不尽なアンケート回答などは出てこなくなると思う。回答は直接教員に見えないよう配慮すれば、記名式にしても問題はない。問題があれば FD 委員が当該学生に質問すればよい。教員の勤務評定にも関わってくるならば、「アンケート」を抜本的に見直して頂けないと困る。真摯な検討を望む。

編集後記

平成19年（2007）度を起点とする「中期目標・中期計画」は3年目を終え、また、これまでの「年度計画」の実績は、岡山県が設置した岡山県地方独立行政法人評価委員会において高く評価されているところではありますが、それはすべての教員が教育成果を深く認識しつつ、教育活動等に邁進した大きな成果と言えましょう。

さて教育年報2009ですが、これは2つの章で編成され、第1章のタイトルは「2009年度の主な改革」、第2章のタイトルは「FD活動」となっております。これは、「教育改革に取り組む姿を記録する教育年報」の性格をいっそう持たせることの必要性和重要性を再認識した結果です。さらに、これら2つの章は、社会に出て活躍できる能力を身につけた学生の育成に資する重要な教育活動の成果と判断されたからにほかなりません。

執筆担当の教員の方々には、多忙中にもかかわらず、精力的に内容の充実化に向けて挑戦して頂きました。編集委員を代表して、厚く御礼申し上げます。さらに本年報を作成するに当たり、多くの事務職員の方々のご協力を頂きました。このことに関しても紙面を借りて、深謝申し上げる次第です。

内容ならびに量的にみて濃淡があることは否定できませんが、昨年度に比して大きく充実した年報になったものと言えます。

最後になりましたが、編集委員一同、教員の方々には本年報で記述された内容を、是非、熟読玩味し、法人化元年から未来ある法人化を目指した21年度の成果をあらためて見直し、今後の教育活動のあり方を再考する上での資料にされんことを、切にお願い申し上げます。

岡山県立大学評価委員会・教育年報編集担当 中嶋和夫

発行 〒719-1197
岡山県総社市窪木 1 1 1 番地
岡山県立大学
TEL 0866-94-2111
URL <http://www.oka-pu.ac.jp>

編集 岡山県立大学評価委員会
印刷 サンコー印刷株式会社